

破
戒

破戒

登場人物

瀬川丑松

土屋銀之助

お志保

風間敬之進

島崎藤村

【1】

島崎藤村（以下、藤村）が来る。

藤村

これは過去の物語である。過去には後の時代に取って、反省すべき事柄も多い。過去こそ、真実であるからであろう。どうも島崎藤村です。「破戒」始めます。

天長節の夜は宿直の当番であったので、

瀬川丑松と土屋銀之助の二人は学校に残った。

土屋銀之助（以下、銀之助）が来る。

藤村

風間敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

風間敬之進（以下、敬之進）が来る。

藤村

夕飯の後、まだ宿直室で話しこんでいるうちに、時計は八時打ち、九時打った。

それは翌朝の霜の烈しさを思わせるような晩で、寒かった。丑松が見廻りに出て行った後、敬之進は火鉢に齧り付いていた。二十分ばかり経って丑松が帰って来た。

瀬川丑松（以下、丑松）が来る。

銀之助 おい、どうした？

敬之進 顔色が悪いですよ。

藤村

丑松は話そうか、躊躇する。二人が見守るので。

丑松

実は、不思議なことがあるんだ。

銀之助 不思議なとは？

丑松 校舎を一廻りして、運動場の木馬のところまで行くと、誰かが呼ぶ声がした。

聞いたような声だなと思ったら、そのはずさ、僕の親父の声なんだ。

銀之助 妙なことが有るものだな。

敬之進 どんな風に君を呼びましたか、その声は。

丑松 丑松とつづけざまに。

敬之進 君の名前を？

銀之助 馬鹿な、そんな事があるものか。

丑松 確かに呼んだんだよ。親父の声だった。

銀之助 本当かい？また欺《かつ》ぐつもりだろう。

丑松 本当だよ。確かに聞いた。

銀之助 お父さんは西乃入《にしのみり》の牧場だろう。あんな遠くから君を呼ぶなんて馬鹿らしい。

敬之進 しかし、そう一概に言ったものでもないよ。

藤村 急に丑松は聞耳を立てた。顔色を変えて恐れを表したのである。

丑松 や。また呼ぶ声がある。僕はもう一度行って来る。

丑松、歩き回る。

藤村 銀之助は友のことが案じられる。敬之進は驚いてしまって、何かの前兆ではある

2

まいかと考える。

敬之進 どうも気掛かりだ。どうでしょう、我々も行って見てやっては。

銀之助 そうですね。

敬之進と銀之助、丑松の後を追う。

藤村 丑松は、声のする方を辿って行った。何もかも夜の空気に包まれ、

静かに闇に隠れて居るように見える。

藤村、「親父」と書かれたお面を被る。

丑松 こっちかな？

藤村（親父） 丑松、丑松。

丑松 おとっさん、おとっさん。どこですか？

銀之助（丑松に） やあ、こんな所にいたのか。

丑松 さつき。また、親父の声が。

敬之進 声が？

銀之助 そんなことは理窟に合わん。きつと神経のせいだ。

丑松 そうかなあ。

銀之助 聞こえるはずのない声が聞えるなんて、疑心が産み出した幻さ。

丑松 幻？

銀之助 耳に聞える幻。いわゆる幻聴だよ。

丑松 そうかも知れないけど。

藤村（親父） 丑松、丑松。

丑松 おとっさん、おとっさん。

銀之助 おい、君。どうした？

丑松 今、また声が。

敬之進 今？

銀之助 何も聞こえなかったぞ。

丑松 そうか。（敬之進に）何か聞えましたか。

敬之進 いいえ、吾輩には何も。

銀之助 君以外、声は聞えない。まあ、僕は信じられないね。目で見たって信じられない。

この手で触って、それからでなければ信じられない。はははは。それはそうと、やけに寒く成ってきたな……行こうか。

丑松 ああ。

銀之助、去る。

敬之進 翌日の朝。丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。

父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。

銀之助、牛の角の様な物を持ってきて、

藤村（親父）を突き刺し去る。

藤村（親父） 丑松、丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、

いかなる人に巡り合おうと決つて打明けるな、一時の感情や気の迷いで、

この戒《いましめ》を破つたなら、世の中から捨てられたものと思え。

隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多《えた》の秘訣じゃ。

丑松 おとっさん、おとっさん。

藤村がいる。

藤村 それは忘れることの出来ない旅であった。こうして千曲川の岸に添うて、父の死の知らせで故郷へ帰って行く。足掛三年と言えば、それほど長い月日とも聞えないが、彼には一生の移り変わりの始った時代であった。心の革命が猛烈に起って、しかもそれを深く感ずるのである。

丑松が来る。

丑松 自分の運命を悲しみ、生涯の変転に驚いたりして、無限の感慨に沈み歩いた。人目の無い道端の枯草に倒れて、声を揚げて慟哭したいとも思った。いかんせん、泣きたくも泣くことの出来ない程、心は重く暗く閉ざされていた。

藤村 飯山を離れて行けば行く程、次第に自由な天地へ出て来たような気がした。北国街道の灰色な土を踏んで、花やかな日の光を浴び、時には岡に上り桑島の間を歩み、時にはまた街道の両側に並ぶ町々を通り過ぎて帰ったのである。

丑松 山と山との間の深い谷には、青々と炭焼の煙が立登るのも見えた。当世風の紳士を乗せた一台の人力車が後ろから来る。見れば代議士の候補者の高柳利三郎。代議士の候補者に立つものは、政見を発表する為に忙しくなる時節。いずれ選挙の準備として、地方廻りに出掛けるのであろう。

銀之助、「高柳」と書かれたお面を被って来る。

藤村 丑松の側《わき》を、高柳は意気揚々として、すこし人を尻目にかけて、挨拶もせずに通り返した。二三町離れて、高柳は急に何か思付いたように振返って見たが、丑松は気にも留めなかった。汽車に乗るべきところへ着いたのは、午後二時頃。先に駈付けた高柳も、同じ列車を待ち合せて居たと見え、発車時間の近い頃に休み茶屋から来た。

丑松 どこへ行くのだろう、あの男は。

藤村 それとなく高柳の様子を窺うと、相手も注意して見るらしい。だが何となく避けるという風で、お互いに顔を知って居るというだけなので、名乗合ったことが有るでなし、二人は言葉を交そうともしなかった。発車を報せる鈴の音が鳴った。乗客はいずれも中へと急いだ。黒煙をあげ直江津の方から来た列車は停った。丑松は機関車よりの一室を選び乗った。そこに居た紳士と顔を見合せた時は、あまりの奇遇に胸を打たれたのである。

敬之進、「猪子」と書かれたお面を被って来る。

丑松 猪子先生。こんにちは。

藤村 紳士も、意外な処で、という驚いた顔つき。

敬之進（猪子） おお、瀬川君でしたか。

藤村 夢寐《むび》にも忘れないその人の前に、丑松は偶然にも出会ったのである。

丑松 実に巡り合いの唐突で、意外で、心の底が外面《そと》に現れた光景。

藤村 新聞で血を吐く重い病状と猪子蓮太郎のことを読んで、見舞状まで書いた丑松は、

この先輩の案外元気のよいのを見て、喜びもすれば不思議にも思った。かねて心配した程に体の衰えが目につくでも無い。眼は神経質な光を帯びて、悲壮な心の内を映して見せた。早速、その事を言出して、

丑松 実は新聞で見ました。東京の御宅へ宛てて手紙を上げました。

敬之進（猪子） そんなことが出ていましたか。間違えですよ。御覧の通り、旅行が出来る位ですから安心して下さい。

藤村 聞いて見ると、猪子蓮太郎は赤倉の温泉へ養生に行つて、帰途《かえりみち》であるとのこと。そして、同伴《つれ》の人を紹介した。

お志保、「市村」と書かれたお面を被って来る。

丑松 この紳士は、この冬打つて出る候補者の一人、雄弁と男気で知られた市村弁護士であった。

お志保（市村） 瀬川君とおっしゃるんですか。私は市村です。

敬之進（猪子） 市村君とは、偶然、御懇意なつて、今では非常に御世話になっています。

お志保（市村） 我輩こそ色々とお世話になっているので。

丑松 これから市村弁護士は上田を始めとして、小諸、岩村田、白田などの地方を遊説する為、政見発表の途《みち》にあるとのこと。親しく佐久小県地方の有権者を訪問して選挙を争う意気込であるとのこと。

藤村 猪子はまた、この友人の応援の為、一つには自分の研究の為、しばらく信州に踏止まりたいという考えで、今宵は上田に一泊、いずれ二三日の中には弁護士と、丑松の故郷にも出掛けて行くとのことであった。

お志保（市村） そんなら、瀬川さんは今、飯山に御奉職《おいで》ですな。そこから候補者が出ますね。御存じですか、高柳利三郎という男を。

藤村 蛇《じゃ》の道は蛇《へび》だ。丑松は駅で落合ったことから、今この同じ列車に高柳利三郎も乗込んで居るということを話した。市村弁護士は不思議そうに首を傾《かし》げながら、

お志保（市村） 何処へ行くのだろう。しかし、だから汽車の旅は面白い。同じ列車の内に乗合せていても、互いに知らずにいるのですからなあ。はははは。

藤村 駅々で列車が停ると、農夫の乗客が幾群か入込んだ。千曲川の水も、大な谿流の勢に変わって、白波を揚げて谷底を下る。

丑松 濃く青く清々とした空気は窓から流れ込んで、

藤村 次第に高原へ近づいたことを感じる。やがて、汽車は上田へ着いた。旅人の多くが下りた。猪子蓮太郎たちも降りる。

敬之進（猪子） 瀬川君、いずれ根津で御目に懸ります。失敬。

敬之進とお志保、去る。

丑松 再会を約束して行く先輩の後姿を見送った。

藤村 丑松は何となく物足りなかつた。あれほど打解けてくれて、わけ隔てのない言葉を掛けられても、自分はどこかに他人行儀なところがあると考えると悲しくも情なくも思つたのである。

丑松 先輩に対して起る心のやるせなさは、自分もまた同じように『穢多である』という事実から湧上る。秘密を隠している以上、例え他の事を話したところで、自分の想いが先輩に伝わる時はない。それを告白してしまつたら、どんなに重荷が軽くなるだろう。先輩は驚いて、自分の手を執って、君もそうかと喜んでくれるだろう。そうだ、せめて先輩だけには話そう。

お志保と藤村がいる。

お志保 蓮華寺《れんげじ》では下宿を兼ねた。丑松が急に引っ越しを思い立ち、借りる事にした部屋は、蔵裏《くり》続きにある二階の角のところ。

藤村 寺は信州、下水内郡《しもみのちごおり》飯山町二十何ヶ寺の一つ、二階の窓に寄りかかって眺めると、銀杏の大木や飯山の町も見える。

お志保 さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るような小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬の雪除けとして使用する特別の軒庇《のきびさし》から、寺院と樹木の梢まで。古めかしい町の風景が香の煙の中に包まれて見える。ひと際、目立つのは、丑松が奉職している小学校の白く塗った建物。

藤村 丑松が引っ越しを思い立ったのは、不快に感ずることが今の下宿に起ったからで、もっとも賄いでも安くなければ、誰もこんな部屋に満足するものは無からう。壁は壁紙で張りつめて、それが茶色になって居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、世離れた僧坊であった。

銀之助と敬之進が来る。

銀之助 今の下宿には、半月程前、一人の男を共に連れて、下高井の地方から出て来た大日向《おおひなた》という大尽《だいじん》、飯山病院へ入院の為とあって、しばらく泊って居たことがある。入院は間もなくであった。

敬之進 もとより病室は第一等、看護婦の肩に懸って長い廊下を往復するうちに、おのずと豪奢《ごうしゃ》が目について、誰が嫉妬で噂するともなく、
お志保 あれは穢多《たへた》だ。ということになった。病院中に伝わり、患者は総立ち。追い出してしまえ、それが出来ないならば、こぞって御免こうむる。

銀之助 と院長を脅かすという騒動。いかに金尽《かねづく》でも、偏執《へんしゅう》には勝てない。ある日、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠はもとの下宿へ、院長は毎日来て診察するが、今度は下宿のものが承知しない。

敬之進 不浄だ、不浄だ。

お志保 無遠慮な人々の唇をついて出た。

藤村 丑松は憤って、あの大日向の不幸を憐れんだ。穢多の悲惨な運命を思いつづけた。丑松もまた穢多なのである。

銀之助 丑松は純粹な北部の信州人。佐久小県《さくちひさがた》の岩石の間に成長した若者とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられ、学力優等の卒業生として長野の師範校を出たのは二十二の年齢《とし》。

敬之進 世の中へ突出される、すぐに丑松はこの飯山へ来た。それから足掛三年目の今日、ただ熱心な青年教師として、飯山の人に知られているのみで、実際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものがなかった。

丑松が来る。

お志保、「奥様」と書かれたお面を被る。

お志保（奥様）では、いつ引越していらっしやいますか。

藤村 と、言ったのは蓮華寺の住職の匹偶《つれあい》。「奥様」と崇められて居るこの有髪《うはつ》の尼は、都の生活も知らないでもない口の利き振であった。

銀之助 引越しは明日にも、今夜にも、と言いたいが、さて差当って引越しするだけの金がなかった。実際持合せは四十銭しかなかった。四十銭で引越しは無理だ。

敬之進 今の下宿の払いもしなければならぬ。月給は明後日。それまで待つしかなかった。

丑松 こうしましょう、明後日の午後ということにしましょう。

お志保（奥様）明後日？

丑松 駄目ですか？

お志保（奥様）明後日は二十八日じゃありませんか。私は月が変わってからいらっしやるかと思ひましてサ。

丑松 いや、実は急に引越しを思い立ったものですから。

藤村 下宿の出来事は烈しく胸を騒がせる。

銀之助 それを聞かれたり、話したりするのは怖い。

敬之進 穢多に関する事は、いつも避けるようにするのが癖である。

お志保（奥様）なむあみだぶ。なむあみだぶ。

藤村 奥様は別に深く掘って聞こうともしなかった。

お志保、「奥様」と書かれたお面を取る。

丑松 蓮華寺を出たのは五時であった。書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱えて、

鷹匠《たかしょう》町の下宿へ帰って行った。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が群れていた。

お志保 本町の雑誌屋は近頃出来た。店先に新着の書物を筆太に書いて張出してあった。

丑松 かねて新聞広告で見て、出版の日を窺みしていた「懺悔録」

藤村 肩に猪子蓮太郎氏著、定価も書添えた広告が目につく。

丑松 胸の踊るような心地がした。ズボンの袖囊《かくし》へ手を突込んで、銀貨を鳴らして見ながら、その雑誌屋の前を行ったり来たりした。兎に角、四十銭あれば本が手に入る。だが買ってしまえば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。

お志保 一旦は行きかけて、また引返した。ぬっと暖簾《のれん》を潜って手に取る。

粗悪な黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。智識は一種の饑渴《ひもじさ》である。四十銭を出して買い求めた。

敬之進 本を抱いて鷹匠町の下宿に帰って行くと、途中で学校の同僚に出会った。

銀之助 君、大層遅いじゃないか。

お志保 友達思いのホ銀之助は、すぐに丑松の顔色を見て取った。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失って、不安の光を帯びて居たのである。

銀之助 きっと体の具合でも悪いのだろう。

藤村 と銀之助は心に考えて、丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

藤村、去る。

銀之助 君はよく下宿を取替える人だねえ。こないだ引越したばかりじゃないか。

敬之進 その時、丑松の持つて居る本が目についたので、銀之助は、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

丑松 これかね。

銀之助 むむ、「懺悔録」か。相変わらず君は猪子先生のが好きだ。新聞の広告にもあったツケ。こんな本かい。まあ君は愛読を通り越して崇拜だよ、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。さぞかしまた聞かせられることだろうなあ。

丑松 馬鹿言いたまえ。

お志保 と丑松も笑って本を受取った。夕靄《ゆうもや》は低く集って、そこ、ここに灯《あかり》がつく。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すという話をして、この友達と別れた。

丑松 やがて少し行つて振返つて見ると、銀之助は往来の片隅に佇み、こちらを見送つていた。半町ばかり行つてまた振返つて見ると、まだ同じところに佇んでゐるらしい。夕餐《ゆうげ》の煙は町の空をこめて、悄然《しょうぼり》とした友達の姿も黄昏がれて見えた。

お志保と銀之助と敬之進、「丑松」と書かれたお面を被る。

お志保（丑松）馬鹿だ、馬鹿だ、馬鹿だ。僕は、大馬鹿野郎だ。いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、うろうろして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。

丑松 人を、こわがってばかりいる。

銀之助（丑松）みんなに笑われるくらいが落ちさ。人に悪口を言われても、その人の敵意には気が附かず、底の知れない馬鹿とは、僕の事だ。

丑松 僕の事だ。

敬之進（丑松）どだい僕には、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、はつきりしない。淋しい顔をしている人が、なんだか偉そうに見えて仕方が無い。

丑松 なんだか偉そうに見えて仕方が無い。

お志保（丑松）ああ、可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

丑松 みんな可哀想だ。

銀之助（丑松）僕には、昔から、軽蔑感も憎悪も、怒りも嫉妬も何も無かった。

人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。実感としては、何もわからない。

丑松 何もわからない。

敬之進（丑松）人を憎むとは、どういう気持のものか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、何もわからない。ただ一つ、僕が実感として、この胸が浪打

《なみう》つほどによくわかる情緒《じょうちよ》は、可哀想という思いだけだ。

丑松 可哀想という思いだけだ。

お志保（丑松）僕は、この感情一つだけで、生きて来たんだ。他《ほか》には何もわからない。けれども、可哀想だと思っていながら、僕には何も出来ないんだ。ただ、そう思ってそれを言葉で上手に言いあらわす事さえ出来ず、まして行動に於《おい》ては、その胸の内の思いと逆な現象ばかりがあらわれる。

丑松 逆な現象ばかりがあらわれる。

銀之助（丑松）なんの事は無い、僕は、何の役にも立ちやしない。ああ、可哀想だ。まったく、笑い事じゃない。みんな可哀想だ。

丑松 みんな可哀想だ。

敬之進（丑松）このごろ僕には人間がいよいよ可哀想に思われて仕方がないんだ。丑松 いよいよ可哀想に思われて仕方がないんだ。

（このページのテキストのみ、太宰治「新ハムレット」から引用）

敬之進と丑松がいる。

敬之進 丑松は畳の上へ倒れて、しばらく身動きもせずに考えていた。

丑松 やがて疲れが出て眠ってしまった。不意に目が覚めて、部屋を見廻した時は、点けて置かなかった筈のランプが寂しそうに照して、夕飯の膳も置いてある。自分は未だ洋服のまま。

敬之進 たぶん一時間余も眠ったらしい。外では雨の音がする。

丑松 起き直り『懺悔録』の黄色い表紙を眺めた。

敬之進 この本の著者、猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の『新しい苦痛』を表すと言われている。思想が剛健で、精緻《せいち》を兼ね、人を引き付ける力の溢れていることは、その著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多の中から産れたという事実は、丑松の心に深い感動を与えた。

丑松 私は猪子先生を先輩として慕って居るのである。

敬之進 『懺悔録』は、我は穢多なりといふ文句で始めてあった。

藤村、「猪子」と書かれたお面を被って来る。

藤村（猪子） 我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。

敬之進 『懺悔録』には、著者の煩悶の歴史、悲しい過去の思い出、精神の自由を求め、しかもそれが得られないで、不調和な社会の為に苦しみぬいた経験から、朝空を望むような新しい生涯に入るまで。書きあらわしてあった。猪子蓮太郎の新しい生涯は、偶然な身のみならずきから開けたのである。

藤村（猪子） 生れは信州高遠。

敬之進 古い穢多の家柄ということは、長野の師範校に心理学の講師として来て居た頃、丑松がまだ入学する前、同じ南信の地方から出て来た二、三の生徒の口から講師の中に賤民《せんみん》の子がある。この噂が全校にひろがった。

お志保と銀之助が来る。

お志保 ある人は猪子蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、ある人はその学識を、銀之助 いずれも穢多の生れとは思われないうって、嘘だと言張るのであった。

敬之進 出て行け、出て行け。

藤村（猪子） 声は一部の教師仲間の嫉妬から起った。無理が通れば道理が引込む。

丑松 この世の中に、誰が穢多の子の追放を不当だと言うものがあるう。

お志保 いやいよ猪子連太郎が身の素性を自白して、

銀之助 多くの校友に別れを告げて行く時、

敬之進 この講師の為に思いやりの涙を流すものは、

藤村（猪子） 一人もなかった。

お志保 猪子連太郎は師範校の門を出て『学問の為の学問』を捨てたのである。

丑松 この当時の事は『懺悔録』の中に、くわしく記載してあった。私は身につまされ何度も本を閉じ、心が締め付けられて、目を瞑った。

藤村（猪子）、去る。

敬之進 猪子連太郎の筆は、面白く読ませるといふよりも、考えさせる方だ。丑松も書いてあることを離れて、自分の一生ばかり思いつづけながら読んだ。

丑松 今日まで私が平和な月日を送って来たのは、主に少年時代からの境遇にある。

お志保 元々は小諸の向町《むかいまち》の生れ。北佐久の高原に散布する新平民の種族の中でも、ことに四十戸ばかりの一族《いちまき》の『お頭《かしら》』と言われる家柄であった。

丑松 獄卒《ろうもり》と捕吏《とりて》は、維新前まで、先祖代々の職務であって、父はその報酬として、租税を免ぜられた上、別に俸米《ふち》をあてがわれた。

銀之助 それ程の男であるから、貧苦と零落との為、小県郡の方へ家を移した時にも、八歳の丑松を小学校へやることは忘れなかった。

丑松 私が根津村《ねづむら》の学校へ通うようになってからは、もう普通の子供で、誰も私を穢多の子と思うものはなかった。

敬之進 過去の記憶が丑松の胸の中に生き返った。

丑松 七つ八つの頃まで、よく他の子どもにも調戲《からか》われたり、石を投げられたりした、その恐れの方がふたたび起って来た。

お志保 朦朧《おぼろげ》ながらあの小諸の向町に居た頃のことを思い出した。移住する前に死んだ母親のことなどを思い出した。

丑松 『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感じるようになった。

銀之助と敬之進がいる。

銀之助 毎月二十八日は月給の日とあって、学校では人々の顔付も引立って見えた。

授業の終を告げる大鈴が鳴ると、教員たちは早々に書物を片付けて教室を出た。

敬之進 悪戯盛《いたづらざか》りの少年の群は、一時に溢れて、その騒がしき。

銀之助 弁当草履を振廻し、『ズック』の鞆を肩に掛けたりして、帰って行った。

藤村、「校長」と書かれたお面を被り来る。

銀之助 その日は郡視学と町会議員たちが来て、校長の案内で授業を観て回った。

応接室へ帰って、一同雑談で持ち切って、室内に籠る煙草の煙は白い渦のよう。

敬之進 校長に言わせると、教育は則ち規則であった。軍隊風の教育。これが主義で、

藤村（校長）時計のように正確に。これが座右の銘あり、職員を指揮する精神でもある。

銀之助 この主義で押通したのが遂に成功して功績表彰の文字を彫刻した名誉の金牌

《きんばい》を授与されたのである。

敬之進 その一生の記念が、応接室の机の上に置いてあった。人々の視線は黄金の輝きに集まった。町会議員はその見積りの代価を、推測したり感嘆したりして眺めた。

銀之助 十八金、直径《さしわたし》九分、重量《めかた》五匁《ごもんめ》、代価

およそ三十円。これが人々の一致した評価で、添えてある表彰文には、県下教育に貢献するところ尠《すくな》からずと書いてあった。町会議員は改って言った。

お志保、「町会議員」と書かれたお面を被って来る。

お志保（町会議員）つきましては、有志の者が寄りまして御祝の印ばかりに祝杯を差上げた

いと存じますが、いかがでしょう、今晚三浦屋まで御出《おいで》を願えますか。

郡視学さんも、どうか、まあ是非。

銀之助、「郡視学」と書かれたお面を被る。

銀之助（郡視学）いや、そういう御心配に預りましては実に恐縮します。

藤村（校長）今回のことは、教育者に取りましてもこの上もない名誉な次第で、非常に

私も嬉しく思っているのですが。考えて見ますと、これぞ、と言った功績が

あった私では、ない。こういう金牌を頂戴して、恥ずるような次第で。

お志保（町会議員）校長先生、そうおっしゃっては、使いに来た私共が困ります。

藤村（校長） どうですな、貴方《あなた》の御都合は。

銀之助（郡視学） せっかく、ああ言って下さる。御厚意を無にするのは失礼でしょう。

藤村（校長） 御尤《ごもっとも》です。どうか皆さんも、よろしく仰って下さい。

敬之進 実際、地方に入って教育に従事するものの第一の要件は、外でもない、この校長のような凡俗な心づかいだ。かつて学校の窓で想像した様々の高尚な事を、いつまでも考えて、俗悪な趣味を避けるようでは、一日たりとも地方の学校の校長は勤まらない。賢いと言われる教育者は、いずれも町会議員などに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ。金牌を誉めそやし、町会議員は帰って行った。

お志保（町会議員）、去る。

銀之助（郡視学） 見たまえ、この信濃毎日を。君が金牌を授与されたということなど、書いてあますよ。表彰文は全部。それに、履歴までも。

藤村（校長） いや、今度の受賞は大変な評判になってしまいました。どこに行ってもその話が出る。実に意外な人まで知っていて、祝ってくれるような訳で。勝野君も非常に喜んでくれましたね。

銀之助（郡視学） 甥《おい》がですか、そうでしたらう。私のところにも長い手紙をよこしましたよ。実際、甥は貴方の為を思っているのですからな。

敬之進 郡視学が甥と言ったのは、新しく赴任して来た正教員。勝野文平というのがその男の名である。新参の校長は文平を、自分の味方につけようとしていた。

藤村（校長） それに引換え、瀬川君の冷淡なこと。

銀之助（郡視学） 瀬川君？

藤村（校長） 聞いて下さい。こりゃあ、私が直接に聞いたことではないのですけれど。教育者が金牌などを貰って鬼の首でも取ったように思うは大間違だと。そりゃ、彼に言わせたら値打ちのないものでしょうが。時代から言えば、あるいは我々の方が遅れているのかも知れません。しかし新しいものが必ずしも、いいとは限りませんからねえ。なにしろ、瀬川君が、ああして居たんじゃ、私もやりにくくて困る。同志の者ばかり集って、一致して教育事業をやるんでなけりゃあ、到底、面白くいきません。

銀之助（郡視学） そんなに君が面白くないものなら、他の学校へ移すとか、後釜には君の気に入った人を入れるとかサ。

藤村（校長） 移すにしても、何か口実がないと。生徒たちに人望が有ますから。

銀之助（郡視学） まあ私の口から甥を褒めるでも有ませんが、きつと御役に立つだろうと思いますよ。瀬川君に比べると、勝るとも劣ることは、あるまいという積りだ。瀬川君など、どこがいいんでしょう。どうして、あんな教師に生徒が大騒ぎするんだか、私にはさっぱりわからんねえ。

藤村（校長） 先ず、猪子蓮太郎あたりの思想でしょうよ。

銀之助（郡視学） むむ、あの穢多か。

藤村（校長） 猪子のような男の書いたものが若いものに読まれるかと思えば恐ろしい。

不健全、不健全。今の青年の思想は、どうも解りません。

敬之進 その時、応接室の戸を叩く音がした。急に二人は口をつぐんだ。また叩く。

藤村（校長） お入り。

丑松が来る。

丑松 校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。

藤村（校長） いえ。別に、二人で御噂をしていたところです。

丑松 実は風間さんが、郡視学さんに御願いがあるところです。

銀之助（郡視学） 何ですか、私に用事があると。

敬之進 あの、ですネ。

銀之助（郡視学） どういうお話ですか。

敬之進 少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですネ。

丑松 そんなに遠慮しない方がいいじゃ、ありませんか。私から伺います。

風間さんように退職となった場合には、恩給を受けさして頂く訳に

参りませんものでしょうか。

銀之助（郡視学） 無論です、そんなことは。小学校令の施行規則を出して御覧なさい。

丑松 そりゃあ規則は規則ですけれど。

銀之助（郡視学） 規則に無いことが出来るのですか。身体が衰弱して、職務を執るに

たえないから退職する。恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上在職した

ものに限った話です。彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。

丑松 でも、わずか半年のことです。

銀之助（郡視学） それを許したら際限が無い。恩給のことは諦めて養生なさい。

丑松（敬之進に） どうです、貴方からも御願いしてみても、

敬之進 いえ、今の御話を伺えば、私から御願するまでも、ありません。お言葉に従って、

諦めるより外はないと思います。

銀之助とお志保がいる。

銀之助 教員は職員室に集っていた。ここに集る人々は、日々の勤務と、生徒の取扱とに疲れて、さして教育の事業に興味を感じずるでもなかった。

お志保 秋の日の光はガラス窓から射入って、煙草の煙に交る室内の空気を明るく見せた。那視学の甥の勝野文平が、銀之助と並んで話している。

銀之助 校長は役場から来た金の調べを終えて、それぞれ分配するばかりになった。

お志保 丑松は校長を手伝って、人々の机の上に俸給を載せていった。

校長は改まった調子で、敬之進が退職することを報告した。就いてはこの教育者の為に茶話会を開きたいと言出した。

銀之助 賛成の声は起る。敬之進は一礼して、やがて拍子の抜けたように席へ戻った。教員たちが敬之進を取り巻いて慰めて居る間に、丑松は学校を出た。

丑松が来る。

丑松 月給を受取って妙に気強いような心地《こころもち》にもなった。すっかり下宿の払いを済まし、引越は成るべく目立たないように、という考えであった。気掛りは下宿の主婦《かみさん》の思惑で、追い出された大尽の間には一種の關係があつて、それで引越すとも思はれたら、どうしよう。下手なことを言出せば藪蛇だ。

『都合があるから引越す。』理由は其で沢山だ。
お志保 そして頼んで置いた荷車も来る。荷物と言えば、本箱、机、それに蒲団の包があるだけで、道具は一台の車で間に合った。丑松は洋燈《ランプ》を持って、荷車の後について、とぼとぼと歩き、下宿の方を一寸振返って深い溜息をついた。道は悪し、車は遅し、一生の変遷《うつりかわり》を考え、自分の運命を想いながら歩いた。

丑松 寂しいとも、悲しいとも、おかしいとも、何ともかとも名の附けようのない心地《こころもち》は烈しく胸の中を往来し始める。秋の空気が煙のように町々を引包んで居る。途中で紙の旗を押立てた少年の一群《ひとむれ》に出遇った。足拍子揃えて面白可笑しく歌って来るのは尋常科の生徒だ。一緒に歌いながらくる酒酔いがある。よろよろした足元で風間敬之進と知れた。

酔った敬之進が来る。

敬之進 おお、瀬川君。一寸まあ見て呉れ給え。これが我輩の音楽隊さ。

お志保 敬之進は何処かで飲んで来たものと見える。少年の群は一度にどっと声を揚げて、自分達の可傷《あわれ》な先生を笑った。

敬之進 始めえ。

銀之助 敬之進は戯れに指揮するような調子で言った。

敬之進 諸君。まあ聞き給え。こんにちまで我輩は諸君の先生だった。明日からは、

もう諸君の先生ぢやない。そのかわり、諸君の音楽隊の指揮をしてやる。よしか。解ったかね。あはははは。

丑松 と笑ったと思うと、熱い涙はその顔を伝って流れ落ちた。音楽隊は歓呼を揚げて通り過ぎた。

お志保 敬之進は、少年の群を見送って居たが、やがて歩き初めた。

敬之進 まあ、君と一緒にそこまで行こう。時に瀬川君、まだこの通り日も暮れないのに、洋燈《ランプ》を持って歩くとは、どういう訳だい。

丑松 私ですか。私は今引越をするところです。

敬之進 引越か。それで君は何処へ引っ越すのかね。

丑松 蓮華寺へ。

銀之助 蓮華寺と聞いて、敬之進は無言になった。しばらく、歩いてから。

敬之進 ああ。実に君などは羨ましいよ。だって、そうぢやないか。君などはまだ若いんだもの。前途多望とは君のことだ。どうかして我輩も、もう一度君のように若くなって見たいなあ。我輩のように老込んで駄目だねえ。

お志保 にわかにも道も薄暗くなった。敬之進は嘆息したり、時々絶望した人のように唐突《だしぬけ》に大きな声を出して笑った。

丑松 貴方はどこまで行くんですか。

敬之進 我輩かね。我輩は君を送って、蓮華寺の門前まで行くのさ。

丑松 門前迄？

敬之進 なぜ我輩が門前まで送って行くのか、それは君には解るまい。しかし、それを今君に説明しようとも思はないのさ。御互いに長く顔を見合せて居ても、こうして親《ちか》しくするのは昨今だ。いつか君とゆっくり話して見たいもんだねえ。

銀之助 やがて蓮華寺の山門まで来ると、敬之進は、ぶいと別れて行ってしまった。

敬之進と銀之助がいる。

敬之進 もとより銀之助は丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る頃から、よく気性の合った友達であった。同じ寄宿舎の食堂に同じ引割飯の匂いを嗅いだ頃に比べると丑松は変わった。あの憂鬱。以前の快活さを失ったのは、眼付で解る、歩き方で解る、話しをする声でも解る。

銀之助 何が原因で、あんなに深く沈んで行くのだろうか。何かある。必ず何か訳がある。丑松が引越した翌日。私は蓮華寺に尋ねて行った。途中で文平と一緒にあって苔蒸《こけむ》した石の階段を上ると、咲残る秋草の径《みち》の突当たるところに本堂、左は鐘楼、右が蔵裏であった。黄ばんだ銀杏《いちじょう》の樹の下で落葉を掃いて居た寺男に、瀬川君はおりますか。と聞くと、寺男は素足で蔵裏の方へ見に行った。

敬之進 急に丑松の声がした。

丑松が来る。

丑松 まあ、あがりたまえ。

銀之助 見ると二階の窓の障子を開けて、顔を差出して呼ぶのであった。私と文平は暗い梯子段をあがった。秋の日は銀杏の葉を通して部屋に射しこんで、変色した壁紙、掛けてある軸、床の間に並べた書物と雑誌など、すべて黄色に反射して見える。

敬之進 机の上には例の『懺悔録』。読伏せて置いた本に気がついて、丑松は片隅へ押隠すようにして、白い毛布を座蒲団がわりに出して薦《すす》めた。
銀之助 よく君は引越して歩く人さ。一度、引越す癖が着くと、何度でも引越したくなるものに見える。部屋は、先の下宿の方がよさそうじゃないか。

敬之進、「文平」と書かれたお面を被る。

敬之進（文平）なぜ御引越になったんですか。

丑松 どうもあそこの家《うち》は喧《やかま》しくって、寺の方が静は静だ。

銀之助 何だそうだねえ、先の下宿では穢多が追い出されたそうだねえ。

敬之進（文平）そうそう、そういう話ですなあ。

銀之助 だから、そんなつまらん事にでも、あの下宿が嫌になったんじゃないかと。

丑松 どうして？

銀之助

こないだ、ある雑誌を読んだところが、精神病患者のことが書いてあった。

ある人がその男の住居《すまい》の側《わき》に猫を捨てた。さあ、その猫の捨ててあったのが気になって、妻君にも相談しないで、その日の中にぶいと他へ引越した。こういう病的な頭の人になると、捨てられた猫を見たのが引越しの動機になるなどは珍しくもない、という話があったのさ。僕は瀬川君を精神病患者だと言う訳では無いよ。君の様子を見るのに、どこか体の具合でも悪いようだ。

丑松

馬鹿なことを言いたまえ。僕は君、そんな病人ぢゃないよ。

銀之助

しかし。君の身体は変調を来して居るに相違ない。夜寝られないなんて言うところを見ても、どうしても生理的に異常がある。まあ僕は、そう見た。

丑松

そうかねえ、そう見えるかねえ。

銀之助

見えるともサ。妄想《もうそう》、妄想。今の患者の眼に映った猫も、君の眼に映た新平民も、みんな衰弱した神経の見せる幻さ。穢多が追い出されたって何だ。当然《あたりまえ》ぢゃないか。

丑松

だから君は困るよ。いつでも早呑込だ。自分で決めてしまうと、もう他の事は耳に入らないんだから。

敬之進

(文平) 少しそういう所も有ますなあ。

銀之助

引越し方が唐突だからさ。しかし、寺の方が勉強は出来るだろう。

丑松

まえから僕は寺の生活というものに興味を持っていた。昨日の夕方、僕はこの寺の風呂に入って見た。一日働いて疲れているところだったから、入った心地

《こころもち》は格別さ。明窓《あかりまど》の障子を開けると紫苑《しおん》の花などが咲いているぢゃないか。風呂に入りながらキリギリスを聴くなんて、寺らしい趣味だと思っただねえ。今までの下宿とはまるで様子が違う。僕は自分の家《うち》へでも帰ったような心地《こころもち》がしたよ。

銀之助

そうさなあ、普通の下宿ほど無趣味なものはないからなあ。

丑松

それから君、色々なことがある。第一、鼠の多いには僕も驚いた。

敬之進

(文平) 鼠？

丑松

昨夜は僕の枕頭《まくらもと》にも来た。なれなければ、気味が悪いぢゃないか。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。猫を飼って鼠を捕らせるよりか、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。なあに、食物さえ宛行《あてが》ってやれば、そんなに悪戯《いたづら》する動物ぢゃない。うちの鼠は温順《おとな》しいから御覧なさいって。成程そう言われて見ると、少しも人を恐れない。白昼《ひるま》ですら出て遊んでいる。

銀之助

そいつは妙だ。余程奥様という人は変った婦人《おんな》と見えるね。

丑松

なに、それほど変っても居ないが、普通の人よりは宗教的などころがあるさ。

銀之助

他にはどんな人がいるのかい。

丑松 子坊主が一人。下女。それに庄太といふ寺男。ホラ、君等の入って来た時、庭を掃いて居た男があつたろう。あれがそうだね。誰も彼男《あのおとこ》を庄太と言うものはない。みんな「庄馬鹿」と言ってる。日に五度《ごたび》ずつ、払暁《あけがた》、朝八時、十二時、入相《いりあい》、夜の十時、これだけの鐘を撞《つ》くのがあの男の勤務《つとめ》なんだそうだ。

銀之助 それから、あの、なには。住職は。

丑松 住職は今、留守さ。それから、風間さんの娘で、この寺に貰われて来ている、お志保さん。

敬之進（文平） へえ、風間さんの娘ですか。

丑松 そう。お志保さんは、僕たちの来る前の年に学校を卒業した人です。

藤村が来る。

藤村 この日蓮華寺の台所では、先住の命日と言って、精進物《しょうじんもの》を作るので忙しかった。月々の持斎《ちさい》には経を上げ膳を出す習慣《ならわし》であるが、この日は好物の栗飯を炊いて、仏にも供え、下宿人にも振舞いたいと言う。用意の調《ととの》った頃、奥様は台所を他《ひと》に任せて置いて、丑松の部屋へ上つて来た。丑松も、銀之助も、文平も、この話好きな奥様の目には、三人の子のように映つたのである。

お志保、「奥様」と書かれたお面を被つて来る。

お志保（奥様） なむあみだぶ。

藤村 と奥様は独語のように繰返して、やがて敬之進の退職のことを尋ねる。

お志保（奥様） そうですか。いよいよ退職になりましたか。あの酒を断つたらばとは、よく住職の言うことで、禁酒の証文を入れるまでに後悔する時はあつても、また元に戻ってしまう。飲めば困るということは知りつつ、どうしても持った病には勝てないらしいですね。それで敷居が高くなつて、今では寺にも来られないような仕末。あの父親の為には、どんなにかお志保も泣いていることか。

丑松 道理で。私がこちらへ引越して来る時、風間さんは門までついて来ました。なぜ門の前まで一緒に来たか、それは今、説明しようとも思はない、そう言つて、ぶいと行つてしまいました。随分酔つていましたツケ。

お志保（奥様） へえ、うちの前まで？ 酔つていても娘のことは忘れないんでしょうねえ。まあ、それが親子の情ですから。

銀之助 ねえ、奥様。瀬川君は非常に沈んでいますねえ。

お志保（奥様） さようさ。

銀之助 君がこのお寺へ部屋を捜しに来た日だ。ホラ、僕が散歩していると、本町で君に遭遇《でつくわ》したろう。あの時、君の考え込んでいる様子と言ったら。

しばらく君の後姿を見送って、何とも言い様の無い心地《こころもち》がしたね。君は「懺悔録」を持っていた。またあの先生の書いたものなぞを読んで、神経を痛めなければいいがなあと。ああいう本を読むのは、君、よくないよ。

丑松 何故？

銀之助 だって、君、あまり感化を受けるのはよくないからサ。

丑松 感化を受けたつてもよいぢゃないか。

銀之助 そりゃあよい感化ならいいけれども、悪い感化だから困る。見たまえ、君が変ったのは、あの先生のもので読み出してからだ。猪子先生は穢多だから、ああいう風に考えるのも無理は無い。普通の人間に生れたものが、なにもあの真似をしなくてもよからう、極端に悲しまなくてもよからう。

丑松 貧民とか労働者に同情を寄せるのはいかんと言うのかね。

銀之助 そういう訳ではないよ。僕だって、美しい思想だとは思うさ。しかし、君のように、そう考え込んでしまっても困る。なぜ君はああいうものばかり読むのかね、なぜ君は沈んでばかりいるのかね。一体、君は何を考えているのかね。

丑松 僕かい？別にそう深く考えてもいないさ。

銀之助 でも何かあるだろう。

丑松 何かとは？

銀之助 何か原因がなければ、そんなに変わる筈がない。

丑松 僕が変わったかねえ。

銀之助 変ったとも。師範校時代の君と違う。あの時分は、ずっと快活な人だった。もう少し他の方面へ心向けるとか、自分を伸ばすようにしたらどうかね。

こないだから僕は言おうと思っていた。身の具合でも悪いなら医者に診せて、自分で自分を救うようにするが、いいぢゃないか。

藤村 しばらく座敷の中は寂《しん》として話声が絶えた。丑松は何か思い

出したことがあると見え、急に喪心した人のように成って、茫然として居たが。やがて気が付いて我に帰った頃は、顔色がすこし蒼ざめて見えた。

銀之助 どうしたい、君は。はははははは、妙に黙ってしまったねえ。

丑松 ははははは。はははははは。

藤村 丑松は笑い紛《まぎらわ》してしまった。二人は一緒になって笑った。

敬之進（文平）土屋君は「懺悔録」を御読みでしたか。

銀之助 いいえ、まだ読んでいません。

お志保（奥様）何か猪子という先生の書いたものを御覧でしたか。私は未だなんにも読んで見ないんですが。

銀之助 僕の読んだのは「労働」というものと、それから「現代の思潮と下層社会」

あれを瀬川君から借りて見ました。なかなかよいところが有ますよ、力のある深刻な筆で。

お志保（奥様） 一体 あの先生はどこを出た人なんですか。

銀之助 たしか高等師範でしたらう。

敬之進（文平） こういう話を聞いたことが有ましたツけ。あの先生が長野に居た時分、郷里の方でも兎に角、ああいう人を穢多の中から出したのは名誉だと言って、講習に頼んだそうです。そこで彼の先生が出掛けて行った。すると宿屋で断られて、泊る所が無かったとか。そんなことが面白くなって長野を去るようになった、なんて。まあ、師範校を辞めてから、あの先生も勉強したんでしよう。妙な人物が新平民から飛出したものですか。

銀之助 僕もそれは不思議に思っている。あの先生は肺病だと言うから、あるいはその病気の為に、あそこまでいったものかも知れません。

お志保（奥様） へえ、肺病ですか。

銀之助 実際病人は真面目ですからなあ。「死」という奴を眼前《めのまえ》に置いて、平素《しょっちゅう》考えているんですからなあ。あの先生の書いたものも、何となくこう人に迫るようなところがある。あれが肺病患者の特色です。

敬之進（文平） ははははは、君の観察はどこまでも生理的だ。

銀之助 いや、そう笑ったものでも無い。見たまえ、病気は一種の哲学者だから。

敬之進（文平） して見ると、穢多がああいうものを書くんぢゃない、病気が書かせるんだ。こう成りますね。

藤村 こういう話をしている間、丑松は黙って、洋燈《ランプ》の火を熟視《みつ》めていた。自然《おのづ》と外部《そと》に表れる苦悶の情は、頬の色の若々しさに交って、一層その男らしい容貌《おもかげ》を沈鬱《ちんうつ》にして見せたのである。台所の庭の方から、遠く寂しく地響きのように聞えるは、庄馬鹿が米をつく音であらう。夜も更《ふ》けた。

銀之助とお志保と敬之進、去る。

藤村 友達が帰った後、丑松は心の激昂を制《おさ》えきれないという風で、自分の部屋の内を歩いて見た。何となく胸肉《むなじし》の戦慄《ふる》えるような心地がある。先輩の侮辱された、ということは、口惜《くや》しかった。

丑松 賤民だから取るに足らん。こういう無法な言草は、ただ考えて見たばかりでも、腹立たしい。ああ、種族の相違という屏擋《わだかまり》の前には、いかなる熱い涙も、いかなる至情の言葉も、いかなる鉄槌《てっつい》のような猛烈な思想も、それを動かす力は無いのであらう。

藤村、「丑松」と書かれたお面を被る。

藤村（丑松）多くの善良な人はこうして世に知られずに葬り去らるのである。

今は一つとして不安に思われないものはない。深く注意した積りの自分の行為《おこない》が、疑われるようなことに成ろうとは。まあ、考えれば考えるほど用意が無さ過ぎた。なぜ、あの大日向が鷹匠町の宿から追放された時に、自分は静止《じっ》としていなかったろう。なぜ、あんなに泡を食って、この蓮華寺へ引越して来たのだろう。

丑松 何故、先輩の本が出る度に、自分は誇り顔に吹聴したのだろう。

藤村（丑松）何故、先輩の弁護をして、何か先輩と自分との間には一種の関係でもあるように他《ひと》に思わせたのだろう。

丑松 何故、先輩の名前を、他《ひと》の前で口に出したのだろう。何故、内証で先輩の書いたものを買わなかったのだろう。何故、独りで部屋に隠れて、読みたい時にそっと出して読むという知恵が出なかったのだろう。

藤村（丑松）一夜はこういう風に、褥《しとね》の上で慄《ふる》えたり、煩悶

《はんもん》したりして、暗いところを彷徨《さまよ》ったのである。

翌日になって、いよいよ深く意《こころ》を配るようになつた。過ぎ去つた事は、もう仕方がないとして、これから先を用心しよう。猪子蓮太郎の名。人物。著書。一切、先輩に関したことは決して口に出すまい。さあ、父の与えた戒めは身に染々と徹《こた》えて来る。

丑松 決して、それとは告白《うちあ》けるな。私も二十四だ。思えばよい年齢だ。

ああ。いつまでもこうして生きたい。と願えば願うほど、余計に穢多としての切ない自覚が湧き上る。いかなる場合があろうと、大切な戒めばかりは破るまい。

藤村（丑松）と考えた。

藤村と丑松がいる。

藤村 郊外は収穫《とりいれ》の為に忙《せわ》しい時節であった。農夫の群はいずれも小屋を出て、午後の労働に従事していた。田んぼの稲は、すっかり刈り乾して、すでに麦さえ蒔付《まきつ》けたところもあった。一年《ひととせ》の骨折の報酬《むくい》を収めるのは今である。千曲川の下流に添う一面の平野は、宛然《あだかも》、戦場の光景《ありさま》であった。

丑松 その日、私は学校から帰るとすぐに蓮華寺を出て、目的もなしに歩いた。新町の町はずれから、桑畠の間を通って、この郊外へ出たのである。積上げた藁《わら》の片隅で霜枯れた雑草の上に足を投出し、肺の底まで深く野の空気を吸入れ、生き返ったような心地《こころもち》になった。

藤村 見れば男女の農夫。そこに親子、ここに夫婦、粃《もみ》を打つ槌《つち》の音は地に響いて、稲扱《いねこ》く音に交って勇ましく聞える。雀の群は時々空に舞揚がって、やがてまたばつと散り乱れる。

丑松 秋の日は烈しく照りつけて、男は頬冠《ほっかぶ》り、女は編笠《あみがさ》であった。めずらしく風の無い日で、汗は人々の体を流れたのである。野に満ちた光を通して、この労働の光景を眺めて居ると、よりかかった藁の側《わき》を一人の少年が通る。

藤村 日に焼けた額と、柔嫩《やわらか》な目付とで、敬之進の倅《せがれ》と知れた。省吾《しょうご》というのが少年の名前である。

丑松 私が受け持つ高等四年の生徒だ。

銀之助、「省吾」と書かれたお面を被って来る。

丑松 省吾さん、どちらへ？

銀之助（省吾）あの、母さんが沖（野外）に居やすから。

丑松 母さん？

銀之助（省吾）あそこに。先生、あれがうちの母さんでござす。

藤村 と省吾は指差して、すこし顔を紅《あか》くした。同僚の細君の噂、それを聞かないでは無かったが、眼前《めのまえ》に働いて居る女がその人とは、知らなかった。古びた上被《うはっぱり》、茶色の帯、盲目縞《めくらしま》の手甲《てっこう》、編笠に目を避《よ》けて、身体を前後に動かしながら、踏々《せつせ》と稲の穂を扱落《こきおと》して居る。信州北部の女はよく働くことに掛けては男にも勝る程である。烈しい気候を相手に精出す。

丑松 省吾さんはまた指差して、槌を振上げて舂《もみ》を打つ男、あれは手伝いに来た旧《むかし》からの出入のもので、音作という百姓であると話した。

母とその男との間に、箕《み》を高く頭の上に載せ、少しずつ舂を振り落して居る女、あれは音作の女房であると話した。

藤村 その女房が箕を振る度に、空殻《しいな》の塵《ほこり》が舞揚って、人々は黄色い灰を浴びるように見えた。省吾はまた、母の傍《わき》に居る小娘を指差して、異母《はらちがい》の妹のお作であると話した。

丑松 君の兄弟は何人いるのかね。

銀之助（省吾） 七人。

丑松 随分だねえ、七人とは。君に、姉さんに、進さんに、あの妹に、それから？

銀之助（省吾） まだ下に妹が一人と弟が一人。一番うえの兄さんは兵隊で死にやした。

丑松 むむ、そうですか。

銀之助（省吾） その中で、死んだ兄さんと、蓮華寺へ貰われて行きやした姉さんと、わしと。これだけ母さんが違いやす。

丑松 そんなら、君やお志保さんの本当の母さんは？

銀之助（省吾） もういやせん。

藤村 こういう話をして居ると、継母《ままはは》の呼声が聞こえてきた。

お志保、「まま母」と書かれたお面を被って来る。

お志保（まま母） 省吾や。おめえは、まあ、いくつに成ったら御手伝いする積りだよ。

考えて見な、もう十五ぢやねえか。母さんが言わねえだって、御手伝いするのが

当然《あたりまえ》だ。高等四年にも成って、まだ鼠蝨捕《いなごと》りに夢中になってるなんて、そんなものが、どこにある。これ、お作や。

どうしてそんな悪戯《いたづら》するんだい。ほんとに、どいつもこいつも。見ろ、進を。よっほど御手伝いする。

銀之助（省吾） あれ、進だって遊んでいやすよ。

お志保（まま母） 遊んでるものか。さつきから御子守をしていやす。何ぞと言うと、すぐに

口答えだ。母さんの言うことなぞちっとも聞きやしねえ。きつと、また蓮華寺へ

寄って、姉さんに何か言付けて来たんだらう。それでこんなに遅くなったんだらう。

隠れて行って見ろ、酷いぞ。

藤村 丑松は敬之進の家族を見たのである。あの少年も、お志保も、細君の子では無いということが解った。

丑松 細君が苦勞して居るといふことも解った。

藤村と丑松がいる。

藤村

川舟は風変りな屋形造りで、舷《ふなべり》から下を白く化粧して赤い二本筋を横に表してある。半分を板戸で仕切って、荷積みの方に區別がしてあるので、客の座るところは細長い座敷を見るよう。人々は狭苦しい屋形の下に膝を突合せて乗った。やがて水を撃つ棹《さお》の音がした。舟底は砂の上を滑り始めた。丑松は隅の方に両足を投出して、独り深い思に沈んで居た。

丑松

今。学校の連中はどうしているだろう。友達の銀之助はどうしているだろう。あの不幸な、風間さんはどうしているだろう。蓮華寺の奥様は。お志保は、あの寺を思うと、血の湧くような心地《こころもち》になる。雲《みぞれ》は雪に変わって来た。舟の中は人々の雑談で持切った。わけても高柳と一緒に坊主、柄に無い政事上の取沙汰《とりざた》、聞く人は皆な笑い憎んだ。この坊主に言わせると、選挙は一種の遊戯で、政事家は皆な俳優に過ぎない、我々は見物して楽めば好いのだと。この言葉を聞いて、また人々が笑えば弥次馬が飛出す。

藤村

いよいよ市村も切り込んで来るそうだ。

丑松

と一人が言ええば、

藤村

そう言う君こそ御先棒に使われるんぢやないか。

丑松

と、まぜかえすものがある。弁護士の名は幾度か繰返された。それを聞く度に、高柳は不快らしい顔つき。ふふむ、と鼻の先で笑って、嘲ったように口唇を引き歪めた。

藤村

こういう他《ひと》の談話《はなし》の間にも、女は高柳の側により添って、耳を澄まして、夫の機嫌を取りながら聞いて居た。大きな、ぼつちりとした眼のうちには、何となく不安の色も現れて、熟《じつ》と物を凝視《みつ》めるような沈んだところも有った。女は高柳の耳の側へ口を寄せて、何か人に知れないように囁くこともあった。

丑松

どうかすると又、こちらの方を盗むように見た。

藤村

同族の憐れみは、この美しい穢多の女を見るにつけても、丑松の胸に浮んだ。

丑松

あれ程の容姿《きりよう》を持ち、富有《ゆたか》な家に生れて来たのであるから、無論相当のところ縁付かれる人だ。あんな野心家の餌ならなくてもすむ人だ。可愛そうに。こう考えると同時に、女も自分と同じ秘密を持っているかと思いやると、どうもそこが気懸りでならない。よしんば自分を知っているとしたところで、それがどうした、と自分で自分に尋ねて見た。ああして囁くのは何でも無いのであろう。

藤村

とはいうものの、何となく不安に思う懸念が絶えず心の底にあった。

丑松 高柳夫婦を見ないやうにと勉《つと》めた。

藤村 千曲川の瀬に乗って下ること五里。ところどころの舟場へも漕ぎ寄せ、洪水のある度に流れるという粗造な船橋の下をも潜り抜けなどして、丑松は人々とそこから岸へ上った。見れば雪は河原にも、船橋の上にも在った。小降のなかを暮れて、灰白《ほのじろ》く雪の町々。ここにも、ここにも、ちらちら灯が点く。その時、蓮華寺で撞《つ》く鐘の音が空に響き渡る。

丑松 家々は、もう冬籠《ふゆごもり》の用意、軒丈ほどの高さに毎年作りつける粗末な葦簾《よしず》の雪がこいがすっかり出来上って居た。新町の通りへ出ると、一筋暗く踏みつけた町中の雪道を往ったり来たり。いづれも、夕暮を急ぐ人々ばかり。

藤村 丑松は右へ避け、左へ避けして、愛宕《あたご》町をさして急いで行こうとすると、途中で一人の少年に出逢った。

丑松 近づいて見ると、それは省吾君で、酒の罍《びん》を提げて、寒そうに震えながらやって来た。

銀之助、「省吾」と書かれたお面を被って来る。

銀之助（省吾） あれ、先生。まあ、たまげた。

丑松 君は、お使かね。

銀之助（省吾） はあ。

藤村 と、黒ずんだ色の罍を出して見せる。父の為に酒を買って帰るところであった。

丑松 父さんは、お元気ですか？

銀之助（省吾） 父さん？あの。父さんは家に居りやすよ。

丑松 家へ帰ったらねえ、父さんによろしく言って下さい。

藤村 省吾は御辞儀して、ふいと駈出して行った。

銀之助、去る。

丑松 私も雪の中を急いで帰って、寝た。

丑松、寝る。

藤村 そして翌日。

銀之助、「高柳」と書かれたお面を被って来る。

銀之助（高柳） 御頼申《おたのもう》します。

藤村 蓮華寺の蔵裏《くり》へ来て、こう言い入れた一人の紳士がある。階下《した》では、とつくに朝飯を済ましたのに、まだ丑松は顔を洗いに下りて来なかった。銀之助（高柳）御頼申します。

藤村 と、また呼ぶので、下女の袈裟治はそれを聞きつけて、あわてて台処の方から飛んで出て来た。

お志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

お志保（袈裟治）はい。

銀之助（高柳）一寸伺いますが、瀬川さんの御宿は是方様《こちらさま》でしょうか小学校へ御出《おで》なさる瀬川さんの御宿は。

お志保（袈裟治）そうでやすよ。

銀之助（高柳）何ですか、御在宿《おいで》で御座《ござい》ますか。

お志保（袈裟治）はあ、居なさりやす。

銀之助（高柳）では、是非御目に懸りたいことが有まして、こういふものが伺いましたと、どうか、そう仰って下さい。

銀之助、名刺をお志保に渡す。

お志保（袈裟治）御待ちなすって

藤村 二階の部屋へと急いだ。丑松は、まだ寢床を離れなかった。袈裟治が枕頭

《まくらもと》へ来て呼び起こした時は、客の有るということを半分夢の中で聞いて、苦しそうに呻吟《うな》ったり、手を延ばしたりした。寝惚眼《ねぼけまなこ》を擦りながら名刺を眺めると、むっくり跳ね起きた。

丑松（起きて）どうしたの、この人が。

お志保（袈裟治）あんたを尋ねて来なさりやしたよ。

藤村 しばらくの間、丑松は夢のように、手に持った名刺と下女の顔とを見比べて。

丑松 この人は僕のところへ来たんぢやないんだろう。高柳利三郎？

何か間違っちゃないか。こんな人が僕のところへ尋ねて来る筈がない。

お志保（袈裟治）でも来なすったもの。小学校へ御出なさる瀬川さんと言って。

丑松 妙なことが有あるもんだなあ。この男が僕のところ。何の用があつて来たんだ。

それぢやあ、御上りなさいって、そう言って下さい。

お志保（袈裟治）それはそうと、御飯はどうしやしよう。

丑松 御飯？

お志保（袈裟治）あれ、あんたは起きなすったばかりぢやごわせんか。階下《した》で食べなすったら？ 御味噌汁《おみおつけ》も温めてありやすにサ。

丑松 よそう。今朝は食べたくない。それよりは客を下の座敷へ通して待たして置いて下さい。今、部屋を片付けるから。

藤村 袈裟治は下りて行った。丑松は部屋の内を眺め廻した。着物を着更えるやら、寝道具を片付けるやら。散乱《ちらか》ったものは皆な押入へ。床の間に置並べた。本の中には、蓮太郎のものも有る。机の下へ押込んで見たが、また取出して、押入の暗い隅の方へ隠蔽《かく》すようにした。今はこの部屋の内に先輩の書いたものは一冊も出て居ない。

丑松 こう考えて、すこし安心して、さて顔を洗うつもりで、梯子段《はしごだん》を下りた。それにしても何の用事があって、あんな男が尋ねて来たろう。わざわざやって来るとは、

藤村 丑松は客を自分の部屋へ通す前から、疑心《うたがい》と恐怖《おそれ》とで震えたのである。

銀之助 (高柳) 始めまして、私は高柳利三郎です。かねて御名前は承って居りましたが、まだ御尋《おたず》ねするような機会もなかったものですから。

丑松 よく御入来《おいで》下さいました。さあ、どうかまあこちらへ。
藤村 こういう挨拶を蔵裏の下座敷で取交して、やがて丑松は二階の部屋の方へ客を導いて行った。突然なこの来客の底意の程も図りかね、相對《さしむかい》に座る前から、もう何となく気不味《きまづ》かった。

丑松 どうも失礼しました。実は昨晚遅かったものですから、寝過してしまいました。

銀之助 (高柳) いや私こそ、御疲労《おつかれ》のところへ。昨日《さくじつ》は舟の中で御一緒に成ました時に、何とか御挨拶を申し上げようか、申し上げなければ済まないが、こう存じましたのですが、あんなところで御挨拶しますのも失礼と存じまして。御見懸け申しながら、つい御無礼を。承りますれば御不幸が御有なすったそうです。さぞ御力落しでいらっしやいましょう。

丑松 はい。飛んだ災難にあいまして、阿爺《おやぢ》も亡くなりました。

銀之助 (高柳) それはどうも御気の毒なことを。むむ、そうそう、こないだも貴方と豊野のステーションで御一緒に成って、それから私が下りると、貴方も御下りなさる、して見ると、貴方と私とは、往きも、還りも御一緒。何かこう因縁《いんねん》づくとも、まあ、申して見たいぢや有ませんか。

藤村 丑松は答えなかった。

銀之助 (高柳) 御縁が有ると思えばこそ、こうして御話も申上げるのですが、貴方の御心情に就きましても、御察し申して居ることも有ますし。

丑松 え？

銀之助 (高柳) 又、私の方から言いまして、少しは察して頂きたいと思ひまして、それで御邪魔に出ましたような訳なんです。

丑松 どうも貴方の仰《おっしゃ》ることはよく解りません。

銀之助（高柳） まあ、聞いて下さい。御聞及びでも御座いましょうが、私も世話してくれるものが有まして、家内を迎えました。まあ、世の中には妙なことが有るもので、家内が貴方を御知り申して居るのです。

丑松 ははははは、奥さんが私を御存じなんですか。それがどうしました。

銀之助（高柳） まあ、家内などの言うことですから、何が何だか解りませんけれど。しかし、不思議なことには、あいつのうちの遠い親類に当るものとかが、貴方の阿爺《おとつ》さんと昔御懇意であったとか。

藤村 こう言つて、高柳は熱心に丑松の様子を窺《うかが》うようにして見て、

銀之助（高柳） いや、そんなことは、まあどうでもいいと致しまして、家内が貴方を御知り申して居ると言いましたら、貴方だつても御聞流しには出来ませぬまいし、私も私で、どうも不安心に思うことが有るものですから。貴方より外に私ども夫婦のことを知ってるものはなし、又、私たち夫婦より外に貴方のことを知ってるものは有ません。ですから、そこは御互い様に。まあ、御承知の通り、選挙も近づいてまいりました。貴方に助けて頂かなければならない。もし私の言うことを聞いて下さらないとすれば、私は今、ここで貴方と刺しちがえて死にます。ははははは、まさか貴方の命を頂くとも申しませんがね、まあ、私はそれくらいの決心で参つたのです。

藤村 その時、樓梯《はしごだん》を上つて来る人の足音がしたので、急に高柳は口をつぐんでしまった。ついとハムレット丑松は座を離れた。唐紙を開けると、もうそこに友達が微笑みながら立って居たのである。

銀之助、「高柳」と書かれたお面を取る。

丑松 おお、君か。

藤村 銀之助は一寸高柳に会釈《えしゃく》して、別にそう気に留めるでもなく、何か用事でも有るのだろうかに、早合点から独り定めに定めて、

銀之助 君の好きな猪子先生。あの先生が信州へ来てるそうだねえ。昨日、新聞で読んだ。新聞で？

銀之助 ああ、信毎に出て居た。肺病だというけれど、元気な人だねえ。あの先生の演説を聞くと、非常に打たれるそうだ。まあ、瀬川君などは聞かない方がいいよ。

聞けばまた病気が発《おこ》るに決まつてるから。

丑松 馬鹿言いたまえ。

銀之助 あははははは。

藤村 丑松は黙ってしまった。身体中の機関《どうぐ》が動作《はたらき》を止めて、こうして生きて居ることすら忘れたかのようにあつた。

銀之助 僕はこれで失敬する。

丑松 まあ、いいじゃないか。

銀之助 いや、また来る。

藤村 銀之助は出て行ってしまった。

銀之助、「高柳」と書かれたお面を被る。

銀之助（高柳） 只今《ただいま》猪子という方の御話が出ましたが、何ですか、

御懇意でいらっしゃるんですか。

丑松 いいえ。別に、懇意でも有ません。

銀之助（高柳） では、何か御関係が御有なさるんですか。

丑松 何も関係は有ません。

銀之助（高柳） そうですか

丑松 だって関係のありようが無いぢやありませんか、懇意でも何でも無い人に。

銀之助（高柳） そう仰れば、まあ、そんなものですけれど。あの方は市村君と御一緒のようですから、どういう御縁故か、伺って見たいと思ひまして

丑松 知りません、私は。

銀之助（高柳） 市村という弁護士も、あれでなかなか食えない男なんです。つまり猪子と
いう人を抱きこんで、道具に使用《つか》うという腹に相違ないんです。

どうしても貴方に助けて頂かなければならない。それには先づ貴方に御継

《おすが》り申して、家内のことを世間の人に御話下さらないように。そのかわり、
私もまた、貴方のことを。そこは御相談で、御互様に言わないというようなことに
どうか、まあ、これは私が一生の御願いです。

丑松 どうも貴方の御話は私に合点《がてん》が行きません。だって、なにも貴方等

《あなたがた》のことを私が世間の人に話す必要も無いぢや有ませんか。

銀之助（高柳） つまり、そんならどうして下さるといふ御考えなんですか。

丑松 どうするもこうするも無いぢや有ませんか。御話はそれだけです。

銀之助（高柳） 無関係と仰ると？

丑松 だって、私は、なんにも知らないんですから。

銀之助（高柳） まあ、何とか、そのところは御互いの身の為です。決して誰の為でも
無いのです。いずれ、また私も御邪魔に伺いますから、よく考えて下さい。

藤村がいる。

藤村 夕飯の後、蓮華寺では説教の支度をするので忙しかった。昔からの習慣《ならわし》として、大提灯《おおちょうちん》がいくつとなく取出された。寺内の若僧、庄馬鹿、子坊主までよってたかって、火を点《とも》して、それを本堂へ運ぶ。三人はその為に長い廊下を行ったり来たりした。

お志保が来る。

お志保 説教聞きにと、こころぎす人々は次第に本堂へ集って来た。

藤村 寺につく檀家《だんか》のものはさらなり、すでにもう一生の行程《つとめ》を終った爺さん婆さんの群ばかりで無く、繁忙《せわ》しい職業に従う人々まで、それを聴こうとして熱心に集うのを見ても、いかに飯山の町が昔風の宗教と信仰との土地であるかを想像させる。

お志保 聖経《おきょう》の中にある有名な文句、比喻《たとえ》などが、普通の人の会話に交るのは珍しくも無い。

藤村 丑松の身に取って、最も楽しい、又最も哀しい寺住《てらぢみ》の一夜であった。どんなに丑松は胸を踊らせて、お志保と一緒に説教聞く歓楽《たのしみ》を想像したろう。奥様を始め、省吾、お志保は既に本堂へ上って、北の間の隅のところに集って居た。

お志保 庄馬鹿が、自慢の羽織を折目正しく着飾って、これみよがしに人々のなかを分けて歩くのも、おかしかった。その取澄ました様子を見て奥様も笑い、私も笑った。

丑松が来る。

丑松 お志保さんの近くに座った、髪の毛の香が心地よいかおりかかる。提灯の影は花やかに本堂の夜の空気を照らして、一層その横顔を若々しくして見せた。何という親しげな有様だろう、こう考えて、お志保の方を熟視《みまも》る度《たび》に、言うに言われぬ楽しさを感じた。

藤村 住職は奥様と同年《おないどし》という。男のことであるから割合に若々しく、墨染《すみぞめ》の法衣《ころも》に金襴《きんらん》の袈裟《けさ》を掛け、佐久小泉辺《さくちひさがたあたり》に多い世間的な僧侶に比べると、遙かに高尚な宗教生活を送って来た人らしい。

藤村、「住職」と書かれたお面を被る。

藤村（住職） 智識のある猿は世に知らないということが無い。よく学び、よく覚え、多くの経文を暗誦して、万人の師匠ともなるべき程の学問を蓄くわえた。畜生の悲しさには、ただ一つ信ずる力を欠いた。人は、猿ほどの智識が無いにもせよ、信ずる力あって、はじめて仏の境には到り得る。人間と生れた、ありがたさ、朝夕念仏を怠り給うな。なむあみだぶ、なむあみだぶ。

お志保 なむあみだぶ、なむあみだぶ。

藤村（住職） 人々の唱える声は本堂の広間に満ち溢れた。男も、女も、思い思いに賽銭《さいせん》を畳の上へ置くのであった。

丑松 なむあみだぶ、なむあみだぶ。

藤村（住職） やがて聴衆は珠数を提《さ》げて帰って行った。

丑松、寝る。

藤村（住職）、才お志保に抱き付こうとする。

お志保、抵抗して去る。

藤村、「住職」と書かれたお面を取る。

藤村 次第に丑松は学校へ出勤するのが苦しくなってきた。ある日、あまりの

堪えがたさに、欠席の届を差出した。その朝は遅くまで寝ていた。八時打ち、九時打ち、やがて十時打っても、まだ丑松は寝ていた。袈裟治は部屋の掃除をすまして、とっくに雑巾掛《ぞうきんがけ》までしてしまった。なんどか二階へも上って来て見た。

お志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

藤村 それは北国の冬らしい、寂しい日であった。ちいさな冬の蠅は部屋の内に残って、障子をめがけては、あちこち飛びちがっていた。朝寝の床は絶望した人を葬る墓のようなもので有ろう。

お志保（袈裟治） 先生、御客様でやすよ。

藤村 と喚起《よびおこ》す袈裟治の声に驚かされて、丑松は銀之助が来たことを知った。準教員も勤務《つとめ》のままの服装《みなり》で一緒にやって来た。その日は、午後の課業が休みと成ったから、暇を見て尋ねて来たという。

銀之助と「準教員」と書かれたお面を被った敬之進が来る。

藤村 丑松は寢床の上に起直って、半ば夢のように友達の顔を眺めた。

銀之助 君、寝て居たまえな。

丑松 このまま失敬するよ、ナニ、君、そんなに酷《ひど》く悪くもないんだから。

敬之進（準教員） 風邪ですか。

丑松 まあ、風邪だろうと思うんです。昨夜から非常に頭が重くて、どうしても今朝は起きることが出来ませんでした。

銀之助 道理で、顔色が悪い。何か飲んで見たらどうだい。焼味噌のすこし黒焦《くろこげ》になったやつを茶漬茶碗なんかに入れて、そこへ熱湯《にえゆ》を注込《つぎこ》んで、二三杯やって見給え。大抵の風邪は治ってしまうよ。や、好い物を持って来て、出すのを忘れたそれ、御土産《おみやげ》だ。

藤村 こう言っ、風呂敷包の中から取出したのは、十一月分の月給。

銀之助 今日は君が来ないから、代理に受取って置いた。よく改めて見てくれ給え。

丑松 ありがとう。今日は二十八日かねえ。また二十七日だとばかり思っていた。

銀之助 ははははは、月給取が日を忘れるようぢやあ仕様がな。

丑松 全く、ぼんやりして居た。

敬之進（準教員） 今日僕は妙なことを聞いて来た。学校の職員の中に一人新平民が隠れて居るなんて、そんなことを町の方で噂するものが有るそうだ。

銀之助 誰が其様なことを言出したんだろう。

敬之進（準教員） 誰が言出したか、僕も知らないがね。まあ、人の噂に過ぎないだろう。

銀之助 噂にもよりけりさ。よく町の人は色々なことを噂する。やれ、女の教員が

どうしたの、男の教員がこうしたのツて。なぜそう人の噂がしたいんだろう。

そんなら、君、まあ学校の職員を数えて見給え。穢多らしいような顔付のものがあるか。実に怪しからんことを言うぢやないか。なあ。

藤村 こう言っ、銀之助は丑松の方を見た。丑松は無言のまま。

銀之助 ははははは。校長先生は几帳面《きちょうめん》な方だが、新平民とは

思われないうし、と言っ、教員仲間に見当りそうも無い。いやに気取ってるのは

勝野文平君だ。そんな嫌疑のかかるのは文平君ぐらいのものだ。

敬之進（準教員） まさか。

銀之助 そんなら、君、誰だと思っ。さしづめ、君ぢやないか。

敬之進（準教員） 馬鹿なことを言い給え。

銀之助 君はすぐにそう怒るからいかん。

敬之進（準教員） しかし。これがもし事実だと仮定すれば

銀之助 事実？とうてい有得べからざる事実だ。

敬之進（準教員） だから僕だっても事実だと言っ、訳では無いサ。もし事実だと仮定すれば、

と言っ、たんサ。しかし万一そんなことが有るとすれば、どういう結果になっ、行くものだろう、僕は考えたばかりでも恐いような気がする。

藤村 二人の客はもうそれぎりこんな話をしなかった。やがて二人が言葉を残して出て行こうとした時は、丑松は喪心した人のようで、その顔色は一層蒼ざめて見えた。

銀之助 ああ、瀬川君はまだよくないんだろう。

藤村 銀之助は自分で自分に言いながら、準教員と帰って行った。

銀之助と敬之進（準教員）、去る。

藤村 丑松は茫然として部屋の内を眺め廻して居たが、ふと思いついたように、押入の隅のところに隠して置いた書物を取出した。それはいずれも蓮太郎を思い出させるもので、先輩が精力を注ぎ尽した『現代の思潮と下層社会』、『平凡なる人』、『労働』、『貧しきものの慰め』、それから

丑松 『懺悔録』

藤村 本の中をよく改めて見て、蔵書の印がわりに捺《お》して置いた自分の認印

《みとめ》を消していった。ほかに、床の間に置並べた語学の参考書の中から、五、六冊不要なのを抜取って、塵埃《ほこり》を払って、一緒にして風呂敷に包んで居ると、そこへ袈裟治が入って来た。

お志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

お志保（袈裟治） 御出掛？この寒いのに御出掛なさるんですか。気分が悪くて寝て居なさる人が、まあ。

丑松 いや、もうすっかり快くなった。

お志保（袈裟治） お腹が空きやしたろう。何か食べて行きなすったら。あんたは今朝から、なんにも食べなさらないぢやごわせんか。

丑松 すこしも腹は空かない。

藤村 書物の包をなるべく外套の袖で隠すようにして、蓮華寺の門を出た。

お志保、「袈裟治」と書かれたお面を取る。

お志保 雪は往来にも、屋根の上にもあった。人や馬の曳く雪橇《ゆきぞり》は幾台《いくつ》か丑松の側を通り過ぎた。

藤村 空の模様はまた雪にでも成るか。薄い日のひかりを眺めたばかり。

お志保 丑松は歩きながら慄《ふる》えたのである。上町《かみまち》の古本屋にはかつて雑誌を引取って貰った。店先に客の居なかったのを幸い、ついと店に入った、例の風呂敷包を取出した。

丑松 すこしばかり本を持って来ました。これを引取って頂きたいのですが。

お志保 亭主は丑松の顔色を読んで、商人《あきんど》らしく笑って、やがて膝を進めながら風呂敷包を手前へ引寄せた。

藤村、「古本屋」と書かれたお面を被る。

藤村（古本屋）いかほどばかりで、御譲りに成る御積りなんですか。

丑松 貴方の方で思ったところをつけて見て下さい。ナニ、いくらでも好いんですから。

藤村（古本屋）どうも不景気でして、一向にこういうものが捌《は》げやせん。こちらの英語の方だけの御直段《おねだん》で、猪子さんの新刊物の方はほんの御愛嬌《ごあいきょう》こりや御持帰りに成りやした方が御為かも知れやせん。

丑松 まあ、そう言わずに、引取れるものなら引取って下さい。

藤村（古本屋）あまり些少《いささか》ですが、ようごわすか。そんなら、別々に申上げやしようか。それとも籠《こ》めて申上げやしようか。

丑松 籠めて言ってみて下さい。

藤村（古本屋）いかがでしょう、精一杯などころを申上げて、五十五銭。

丑松 五十五銭？

お志保 と丑松は寂しそうに笑った。もとより、いくらでもいいから引取って貰う気。すぐに話は纏《まとま》った。ああ 書物ばかりは売るものでないと、思わないではないが、ここへ持って来たのは特別の事情がある。

丑松 五十五銭を受取った。

藤村（古本屋）去る。

丑松 先生、先生。許して下さい。

お志保 丑松の心は暗かった。古本屋を出て、自分のしたことを考えながら歩いた時は、哭《な》きたい程の思いだった。高柳に蓮太郎と自分とは何の関係もないと言ったことを思い出した。鋭い良心の詰責《とがめ》は、胸に刺さる様な深い悲痛《いたみ》を感じる。羞《は》ぢたり、畏《おそ》れたりしながら、

丑松 どこへ行くという目的もなしに歩いた。

お志保と丑松がいる。

お志保 一ぜんめし、御酒肴《おんさけさかな》、笹屋。丑松の足は自然とそちらの方へ向いた。表の障子を開けて入ると、二三の客もあって、のみくいしている様子。主婦《かみさん》は流許《ながしもと》へ行ったり、竈《かまど》の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

丑松 主婦《かみ》さん、何かありますか。

お志保 生憎《あいにく》今日《こんち》は何《なんに》もなくて御気の毒だいなあ。

丑松 川魚の煮《た》いたのに、豆腐の汁《つゆ》ならごわす。と、かみさんが言った。そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

お志保 主婦《かみさん》が傾《かし》げた大徳利の口をコップに受け、酒をなみなみと注いで貰い飲む。炉の火も燃え上った。黙って飲んだり食ったりして居ると、出て行く行商とすれ違いに釣の道具を持って入って来た男がある。

敬之進が来る。

敬之進 よう、めずらしい御客様が来てますね。

丑松 風間さん、釣ですか。

敬之進 いや、寒いので寒くないのツて。とても川端で辛棒が出来ないから、やめて来た。

丑松 ちったあ釣れましたかね。

敬之進 獲物《えもの》なしサ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。

丑松 とりあえず、一つ差上げましょう。

敬之進 へえ、我輩に呉れるのかね。君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。お志保 寒さと酒慾とで身を震わせながら、さも甘《うま》そうに地酒を飲む。

お志保、去る。

敬之進 しばらく君には逢わなかったような気がするねえ。我輩も君、学校を休《や》めてから別にこれという用が無いもんだから、こんな釣などを始めて、

丑松 何ですか、この雪の中で釣れるんですか。

敬之進 素人《しろうと》はこれだから困る。まあ商売人に言わせると、冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。ナニ、風さえ無けりゃ、そう思った程でも無いよ。しかし、考えて見て呉れ給え。何が辛いと言ったって、用が無くて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。

丑松
そうですね。

敬之進
家内やなんか、せっせと働いて居る側で、自分ばかり懐手《ふところ》して居られずサ。こうして釣に出られるような日は好いが、出られないような日と来ては、実に我輩はする事が無くて困る。ああ、実は、こないだ、久し振で娘に逢いました。

丑松
え？お志保さんに。

敬之進
というのは、君、娘の方から逢ってくれろという、ことづけがあつて、もつとも、我輩もね、君の知つてる通り蓮華寺とは、ああいう訳だし、成るべく娘には逢わないようにしている。ところが何か相談したいことが有ると言うもんだから、まあ、その、久し振で逢つて見た。どうも若いものがずんずん大きく成るのには驚いてしまふねえ。まるで見違える位。それで何の相談かと思つたと、もうどうしても蓮華寺には居られない、一日も早く家《うち》へ帰るようにして呉れ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、我輩も始めてあの住職の性質を知つたような訳サ。

丑松
性質と言うと？

敬之進
こうです。よく世間には立派な人物だと言われていながら、女というものにかけて、非常に弱い性質《たち》の男があるものだね。蓮華寺の住職も矢張《やはり》そうだろうと思つよ。あれほど学問もあり、弁才もあり、ことに宗教《おしえ》の修行もして居ながら、それで迷いが出るというのは、どういう訳だろう。我輩は、信じられなかつた。いや、嘘だと思われなかつた。実に人は見かけによらないものさね。娘はもう悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言つた。だから、娘が家《うち》へ帰りたいと言つるのは、實際無理もない。そりゃあもう一日も早く引取りたいが、家内がもうすこし解つていてくれると、どうにでもして親子でやつて行かれないことも有るまいと思つけれど、現に省吾一人にすら持余して居る

ところへ、また娘が飛込んで来て見給え。今の家内と一緒にいられるもんぢや無い。八人の親子がどうして食えよう。我輩の口から娘帰れとは言われないぢやないか。たとえ先方《さき》が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰つた恩義も有る。一旦蓮華寺の娘と成つた以上は、どんな辛いことがあるかと決して家《うち》へ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、すかしたり励《はげま》したりして、無理やりに娘を迫立ててやつたよ。可愛そうなものさ。

丑松
知りませんでした、お志保さんがそんな辛い思いをしていたなんて。

敬之進
吾輩は情けない父親だよ。

銀之助と「校長」と書かれたお面を被った藤村がいる。

銀之助 月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の室と定めて、毎朝授業の始まる前には、必ずそこに閉籠《とちこも》るのが癖。それは事務の準備《したく》をする為でもあったが、又一つには職員等《たち》の不平と煙草の臭気《におい》とを避ける為で。

「文平」と書かれたお面を被ったボ敬之進が来る。

銀之助 戸を叩くものが有る。その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。

校長はこうして、お気に入りの教員から、秘密な報告を聞くのである。教員の蔭口、其他時間割と月給とに関する五月蠅《うるさい》ほどの嫉《ねた》みと争いとは、ここに居て手に取るように解るのである。こう思いながら、校長は文平をなかへ導いたのであった。いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。

藤村（校長） 君は今、妙なことを言ったね。何か瀬川君のことに就いて新しい事実を発見したとか言ったね。

敬之進（文平） はあ。

藤村（校長） どうも君の話は解りにくくて困るよ。遠廻しに匂わせてばかり居るから。

敬之進（文平） だって、校長先生、人の一生の名誉に関《かか》わるようなことを、そう迂濶《うかつ》にはしゃべれないぢやありませんか。

藤村（校長） ホウ、一生の名誉に？

敬之進（文平） まあ、私の聞いたのが事実だとして、それがこの町へ知れ渡ったら、恐らく瀬川君は学校にいらなくなるでしょうよ。学校にいられないばかりぢやない、社会から追放されて、二度と世に立つことが出来なくなるかも知れません。

藤村（校長） へえ。学校にも居られなくなる、社会からも追放される、と言えば君、非常なことだ。それではまるで死刑を宣告されるも同じだ。

敬之進（文平） まずそう言ったようなものでしょうよ。もつとも、私が直接《ぢか》に突留めたという訳でも無いのですが、色々なことをあつめて考えて見ますと。ふふ。

藤村（校長） ふふ、ぢや解らないねえ。まあ話して聞かせてくれ給え。

敬之進（文平） しかし、校長先生、私からそんな話が出たということになりますと、すこし私も迷惑します。

藤村 なぜ？

敬之進（文平） 何故ツて、そうぢや有ませんか。私が取って代りたい為に、そのようなことを言いふらしたと思われても厭ですから。毛頭、私はそんな野心がないんですから。

藤村（校長） 解ってますよ、そんなことは。誰が君、そんなことを言うもんですか。そんな心配が要るもんですか。君だっても他の人から聞いたことなんでしょう。それ、見たまえ。

銀之助 文平が思わせ振な様子をして、何か意味ありげに微笑めば微笑むほど、余計に校長は聞かずに居られなくなった。

藤村（校長） では、勝野君、こういうことにしたらいいでしょう。我輩はその話を君から聞かない分にして置いたらいいでしょう。さ、誰も居ませんから、話して聞かせてくれ給え。

銀之助 こう言って、校長は文平に耳を貸した。

敬之進、藤村（校長）に耳打ちする。

銀之助 文平が何か私語《ささや》いて聞かせた時は、見る見る校長も顔色を変えてしまった。急に戸を叩く音がする。ついと文平は校長の側を離れて窓の方へ行った。戸を開けて入って来たのは

丑松が来る。

銀之助 丑松で、入るや否や思わず一步《ひとあし》逡巡《あとずさり》した。

丑松 何を話して居たのだろう、この二人は。

銀之助 丑松は猜疑深《うたぐりぶか》い目付をして、二人の様子を怪まずには居られなかったのである。

銀之助、去る。

丑松 校長先生、どうでしょう、今日はすこし遅く始めましたら。

藤村（校長） さよう、生徒は、まだ集りませんか。

丑松 どうも思うように集りません。この雪ですから。

藤村（校長） しかし、もう時間は来しました。生徒の集る、集らないは。兎に角、規則というものが第一です。どうぞ小使に言っ、鈴を鳴らさせて下さい。

丑松 わかりました。

丑松、去る。

藤村（校長） 一体、君は誰から彼のことを聞いて来たのかね。

敬之進（文平） 妙な人から聞いて来ました。実に妙な人から

藤村（校長） どうも我輩には見当がつかない。

敬之進（文平） 人の名譽にも関わる事だから、話だけするが、名前を出してくれては困る、と先方《さき》の人も言うんです。代議士にでも成ろうという位の人物ですから、無責任なことを言う筈《はず》も有ません。

藤村（校長） 代議士にでも？

敬之進（文平） ホラ。

藤村（校長） じゃあ、あの新しい細君を連れて帰って来た人じゃ有ませんか。

敬之進（文平） まあ、そこいらです。

藤村（校長） して見ると。ははあ、あの先生が地方廻りでもして居る間に、どこかでそんな話を聞込んで来たものかしら。しかし、驚ろいたねえ。瀬川君が穢多だなどとは、夢にも思わなかった。

敬之進（文平） 実際、私も意外でした。まあ、聞いて下さい。こないだまで彼は鷹匠

《たかしよう》町の下宿にいました。あの下宿で穢多の大尽が追い出されました。すると突然《だしぬけ》に蓮華寺へ引っ越してしまいましたらう。ホラ、おかしいぢや有ませんか。

藤村（校長） それさ、それを我輩も思うのさ。

敬之進（文平） 猪子蓮太郎との関係だつてもそうでしょう。あんな病的な思想家ばかりありがたく思わないだつて、他にいくらも有そうなものぢや有ませんか。穢多の書いたものばかり特に大騒ぎしなくても好きそうなものぢや有ませんか。どうも鼻顧《ひいき》の仕方は普通の愛読者と少し違うぢや有ませんか。

藤村（校長） それにしても、よく知れずに居たものさ、どうも彼の様子がおかしいと思つたよ、訳もなしに、ああ考え込む筈《はず》が無いからねえ。文平君。なるほど、君の言つた通りだ。一生の名譽にも関わることだ。まあ、もう少し秘密を探つて見ることにしようぢやないか。

敬之進（文平） この話が、あの代議士の候補者から出たということだけは決して言わないで下さい。さもないと、私が非常に迷惑しますから。

藤村（校長） 無論さ。

藤村がいる。

藤村 宵の勤行《おつとめ》の鉦《かね》の音は一種異様な響をハムレット丑松の耳に伝えるようになった。もう世離れた精舎《しようじゃ》の声のようにも

聞えなかった。同じ人間世界の情慾の声、という感じしか耳の底に残らない。

丑松は敬之進の物語を思い浮べた。住職を卑しむ心は、卑しむというよりは怖れる心が、胸をついて湧上って来る。しかし、お志保は香《か》のある花だ、

二階へ通う廊下で、丑松はお志保に逢った。

丑松が来る。

丑松 蒼ざめて死んだような彼女の顔付と、悲しみのある黒い眸《ひとみ》

藤村 彼の眼に映るお志保も不思議そうに顔を眺めて、喪心《そうしん》した人のような男の様子を注意して見ている。

丑松 何も言えず黙って会釈《えしゃく》して別れたのである。自分の部屋へ入って独りで暗い部屋の内に座っていた。

「奥様」と書かれたお面を被ったお志保が来る。

お志保（奥様） 先生、御勉強ですか。

藤村 と声を掛けて、奥様が入って来た。

お志保（奥様） どうぞ私に手紙を一本書いて下さいませんか、すみませんが。

丑松 手紙を？

お志保（奥様） 長野の寺院《てら》に居る妹のところへ遣《や》りたいのですがね、実は自分で書かうと思ひまして、書きかけては見たんです。どうも私共の手紙は、長くばかりになって、肝心の思うことが書けないものですから。いっそこりや貴方《あなた》に御願ひ申して、手短く書いて頂きたいと思ひまして。いえ、なに、そんなに煩《むづか》しい手紙でも有ません。

丑松 書きましょう。

藤村 と引受けた。この答えに力を得て、奥様は手紙の意味を話した。

お志保（奥様） 一身上のことに就いて相談したい。この手紙 着次第《ちゃくしだい》、是非、出掛けて来るように、蟹沢から飯山まで船も発《た》つ、もし舟が嫌なら、途中迄車に乗って、それから雪櫃に乗替えて来るように、今度という今度こそは諦めた、自分はもう離縁する考えで居る。

藤村 と書いてくれと頼んだ。

お志保（奥様） 他の人とは違って、貴方ですから、私もこんなことを御願ひするんです。

訳を御話しませんか、不思議だと思つて下さるかも知れませんが

丑松 いや。私も薄々聞きました。実は、あの風間さんから。

お志保（奥様） ホウ、そうですか。敬之進さんから御聞きでしたか。

丑松 もつとも、詳しい事は私も知らないんですけれど。

お志保（奥様） ああ、うちの和尚さんも彼年齢《あのとし》になつて、まだ今度のようなことが有ると、もう私はなんにも手に着きません。一体、和尚さんの病氣というは、今更始つたことでも無いんです。先住は早く亡《な》くなりまして、和尚さんその後へ直つたのは、まだようやく十七の年だつたということでした。和尚さんの病氣はもうその頃から起つて居たんですね。相手の女というは、西京の魚《うお》の棚《たな》、油《あぶら》の小路《こうぢ》というところにある宿屋の総領娘、

お金を遣つて、女の方の手を切らせました。そこで和尚さんも、本当に懲こりなければ成らないところです。ところが持つて生れた病は仕方の

無いもので、それから三年経つて、今度は東京にある真宗の学校へ勤める

ことに成ると、また病氣が起りました。

藤村 手紙を書いて貰ひに来た奥様は、用をそつちのけにして、いろいろ並べたり訴えたりし始めた。淡泊《さつぱり》したようでもそこは女の持前で、聞いて貰わずには居られなかつたのである。奥様の述懐を聞取つて、丑松は望みの通りに手紙の文句を認《したた》めてやつた。幾度か奥様は口の中で仏の名を唱《とな》えながら、これから将来《さき》のことを思い煩《わづら》うという様子に見えるのであつた。

お志保（奥様） おやすみ。

お志保（奥様）、去る。

藤村 という言葉を残して奥様が出て行つた後、彼は独り考えていた。

丑松 それは沈静《ひっそり》とした、氣の遠くなるような夜。人の起きて居る時刻では無かつた。階下《した》では皆な寝たらしい。ふと、何か忍《しの》び音《ね》に泣くような若い人の声が細々と耳に入る。梯子段《はしごだん》の下あたり、暗い廊下の辺でもあるか、誰かしら声を吞《の》む様子。尚《なお》聞くと、北の廊下の雨戸でも明けて、屋外《そと》を眺めて居るものらしい。ああ。お志保だ。彼女のすすり泣きだ。こう思いつくと同時に、言うに言われぬ恐れと憐れみとが身を襲うように感ぜられた。

藤村と丑松がいる。

藤村 この大雪を衝《つ》いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、という噂は学校に居る丑松の耳にまで入った。高柳一味の党派は、今更のように防御を始めたとやら。有権者の訪問、推薦状の配付、さては秘密の勧誘などがしきりに行われる。高柳派の選挙の争闘《あらしい》は次第に近づいて来たのである。

丑松 その日は宿直の当番として、銀之助と学校に居残ることに成った。

もっとも銀之助は扨《よんどころ》ない用事が有ると出て行って、日暮になってもまだ帰って来なかった。

藤村 丑松は絶えず不安の状態《ありさま》暇さえあれば宿直室の畳の上に倒れて、独りで考えたり悶《もだ》えたりしたのである。

丑松 入相《いりあい》を告げる蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくお志保の身も案じられる。さまさまの想像に耽りながら、悄然《しよんぼり》と五分心の火を熟視《みつ》めて居るうちに……お志保が入って来た。

お志保が来る。

丑松 どうしてこんなところに。

藤村 お志保は何か言いたいことが有って、わざわざ自分のところへ逢いに来たのだ、あの夢見るような、柔嫩《やわらか》な眼。お志保が言おうと思うことはありありと読まれる。

お志保 何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。何故、口唇《くちびる》は言いたいことも言わないで、堅く閉じ塞がって恐れと苦しみとで震えているの。

敬之進、「文平」と書かれたお面を被って来る。

藤村 いつの間にか文平が入って来て、用事ありげに彼女を促した。恥ずかしがる手を執《と》って、無理やりに引立てて行こうとする。

丑松 勝野君、まあ待ち給え。そう君のように無理なことをしなくつても好かろう。敬之進（文平）あなたに、いいことを教えてあげる。

藤村 と文平は彼女の耳へ口を寄せて、恐しい秘密をささやいて聞かせる。

丑松 あつ、そんなことを聞かせてどうする。

藤村 あわてて、とりすがろうとして、ふと。

丑松 眼が覚めたのである。

お志保とボ敬之進（文平）去る。

藤村 我に帰ると同時に、苦しみは身を離れた。

丑松 しかし夢の印象は、なお残って、覚めた後までも恐れ的心が退かない。

藤村 そこへ、戸を開けて入って来たのは銀之助であった。

銀之助が来る。

銀之助 や、どうも大変遅くなった、まだ起きて居たのかい。なぜ、君はそうだろう。

僕がこういう科学書生で、平素《しょっちゅう》そっちの研究にばかり頭を突込んでるものだから、話したって解らない、と君は思うだろう。しかし、僕だって冷い人間ぢや無いよ。人の苦んでいるのを、傍《はた》で観て

嘲笑《わら》ってるような、そんな残酷な人間ぢや無いよ。

丑松 また妙なことを言うね、誰も君のことを残酷だと言ったものは無いのに。

銀之助 そんなら僕にだって話して聞かせてくれ給えな。

丑松 話せとは？

銀之助 何も君のように蔵《つつ》んで居る必要は有るまいと思うんだ。まあ、僕も、大いに悟ったことが有る。それからずっと君の心情《こころもち》も解るように成った。何故君がああ蓮華寺へ引っ越したか、なぜ君が独りで苦んで居るか僕はもう何もかも察している。校長先生などに言わせると、こういうことは三文の価値《ねうち》も無いね。何ぞと言うと、今の青年の病気だ。しかし、君、考えて見給え。校長先生だって一度は若い時も有ったろうぢやないか。だから僕は言ってみよう。今日、校長先生と郡視学とで僕を呼付けて、「なぜ瀬川君は、ああ考え込んで居るんだろう」とこう聞くから、「それはあなたがたも覚えが有るでしょう、誰だって若い時は同じことです」と言ってみよう。

丑松 そうかねえ、郡視学がそんなことを聞いたかねえ。

銀之助 見給え、君があまり沈んでるもんだから、だから君は誤解されるんだ。

丑松 誤解されるとは？

銀之助 君を新平民だろうなんて、実に途方もないことを言う人も有れば有るものだ。

丑松 ははははは。しかし、僕が新平民だとしたところで、一向差支はないぢやないか。

ああ、僕は眠くなったよ。

銀之助

僕は青年時代の悲しみということを考えると、いつも君の為に泣きたくなる。愛と名。青年を活すのもそれだし、殺すのもそれだ。実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。だから今夜はこんなことを言出しもしたんだが、まあ、僕に言わせると、あまり君は物を難しく考え過ぎて居るように思われるね。なにも独りで苦んでばかり居なくたって、好かろう。友達というものが有って見れば、そこはそれ相談の仕様によつて、随分道も開けるといふものさ、君の方から切出してくれると、およばずながら僕だって自分の力に出来るだけのことは尽すよ。

丑松

ああ、そう言ってくれるのは君ばかりだ。君の志は実にありがたい。打開けて言えば、君の察してゐるようなことが有った。確かに有った。しかし、お志保さんは

銀之助

ふむ。

丑松

君はまだよく事情を知らないから、それでそう言ってくれるんだろうと思う。実はねえ、しかしその人は、もう僕は……お志保さん。

藤村

また二人は無言に帰った。しばらくして、銀之助は声を懸けたが、その時はもう丑松は寝ているのであった。

藤村と丑松がいる。

藤村　そして次の日。学校がすむと、丑松は急いで蓮華寺に帰った。葦裏《くり》の入口の庭のところに立って、奥座敷の方を眺めると、白衣を着けた一人の尼が出たり入りたりして居る。奥様に頼まれて書いた手紙のことを考えると、奥様の妹という人であろうか、こう推測が付く。下女の袈裟治が台処の方から駈寄って、彼に一枚の名刺を渡した。見れば猪子蓮太郎としてある。袈裟治は言葉を添えて、今朝この客が尋ねて来たこと、宿は上町の扇屋にとったとの事、よろしくと言置いて出て行ったことなどを話して、外に洋服姿の人も表に立っていたと話した。

丑松　むむ、きつと市村さんだ。

藤村　と独語《ひとりご》ちた。話の様子では確かにそれらしいのである。

丑松　直に、これから尋ねて行って見ようかしら。

藤村　とは続いて起って来た考えであった。人目を憚《はばか》るということさえなくば、無論尋ねて行きたかった。鳥のように飛んで行きたかったのである。

丑松　まあ、待て。書いたものを愛読してさえ、既に怪しいと思われて居るではないか。まして、うっかり尋ねて行ったりなんかして、もしや、ああ、待て、待て、日の暮れるまで待て。暗くなってから、人知れず宿屋へ逢いに行こう。

藤村　こう考えて、部屋の内を歩いて居ると、唐紙の開く音がした。

丑松　奥様が入って来た。

お志保、「奥様」と書かれたお面を被って来る。

お志保（奥様）　こんなことになりやしないか、と私も心配していたんです。

藤村　と前置をして、さて奥様は昨宵《ゆうべ》の出来事を話した。

丑松　聞いて見ると、お志保さんは郵便を出すと言って、日暮頃に門を出たつきり、もう帰って来ないとのこと。筆筒《たんす》の上に載せて置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので、それは真心籠めて書いてあった、

藤村　ところどころ涙に滲んで読めない文字すらもあったとのこと。その中には、自分一人の為に種々《さまざま》な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。聞けば奥様は離縁の決心とやら、それだけは思いとまってくれるように、などと書いてあった。

お志保（奥様）　心配で昨夜一晚中は眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。まあ、父親《おとつ》さんの方へ帰って居るらしい、

藤村　奥様はもう啜上《すすりあ》げて、不幸な娘の身の上を憐むのであった。

可愛そうに、住慣《すみな》れたところを捨て、義理ある人々を捨て、雪を踏んで逃げて行く時のその心地《こころもち》はどんなであったろう。

お志保（奥様）和尚さんだっても眼が覚めましたろうよ、今度という今度こそは。なむあみだぶ。

お志保（奥様）、去る。

藤村 奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。

丑松 釣と昼寝と酒より外には働く気のない老朽な父親、泣く喧嘩する多くの子供、就中《わけても》継母。まあ、あの家へ帰って行ったとしたところで、果してこれから将来《さき》どうなるだろう。言うに言われぬ悲しい心地《こころもち》になった。

藤村 急に丑松は壁を離れた。樓梯《はしごだん》を下り、廊下を通り抜け、何か用事ありげに蓮華寺の門を出た。

丑松 自分は一体何処へ行く積りなんだろう。

藤村 と二三町も歩いて来たかと思われる頃、自分で自分に尋ねて見た。絶望と恐怖とに手を引かれて、半ば夢の心地であった。往来には町の人々が群り集って、春迄も消えずにある大雪の仕末で多忙《いそが》しそう。

丑松 とある町の角のところ、塩物売る店の横手にあたって、貼付《はりつ》けてある広告が目についた。大幅な洋紙に墨黒々と書いて、赤い『インキ』で二重に丸なぞが付けてある。物見高く眺めて居る人々もあった。

藤村 思わず彼も立留った。

丑松 見ると、市村弁護士の政見を発表する会で、蓮太郎の名前も演題も一緒に書並べてあった。会場は上町の法福寺、その日午後六時から開会するとある。

藤村 先輩の事を考えながら、千曲川の畔へ出て来た。長いこと千曲川の水を眺め佇立《たたず》んで居た。せめて先輩だけには自分のことを話そう、ふと、思っているたのである。

丑松 ああ月明りのおぼつかなさ。この光にはどれほどの物のかたちが見えると
言ったら好かろう。どれほどの色が潜んで居ると言ったら好かろう。煙るような夜の空気を浴びながら、次第にこちらへやって来る人影を認めた。演説会が終了したところだ。聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。いづれも激昂したり、憤慨したりして、一人として高柳を罵《ののし》らないものは無い。あるものは市村弁護士に投票しろと呼ぶし、あるものは又、世にある多くの政事家に対して激烈な絶望をもらしながら歩くのであった。蓮太郎の演説は深い感動を町の人々に伝えたらしい。

藤村

行って逢おう。こう考えて、夢のように歩いた。ぶらりと扇屋の表に立って、軒行燈の影に身を寄せながら、なかの様子を覗いて見ると、何かこう取込んだことでも有るかのように人々が出たり入ったりして居る。亭主であろう、五十ばかりの男、周章《あわただ》しそうに草履を突掛けながら、提灯

《ちょうちん》携げて出て行くとうとするのであった。呼留めて、蓮太郎のことを尋ねて見て、亭主の口から意外な報知《しらせ》を聞取った。

丑松

法福寺の門前で先輩が襲われたということを聞取った。眞実《ほんと》か、虚言《うそ》か。もし事実だとすれば、無論。高柳の復讐に相違ない。亭主の後について法福寺の方へと急いだ。

藤村

丑松が駈付けた時は、もう間に合はなかった。弁護士ですら間に合はなかった。聞いて見ると、蓮太郎は一步《ひとあし》先へ帰ると言つて外套《がいつう》を着て出て行く、市村弁護士は残つて後仕末をして居たとやら。傷というは石か何かで烈しく撃たれたもの。たださえ病弱な身、まして疲れた後。

丑松

何の抵抗《てむかい》も出来なかつたらしい。血は雪の上を流れていた。

藤村

思わず先輩の耳の側へ口を寄せた。

丑松

猪子先生。私です。先生。

藤村

なんと呼んで見ても、月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。

丑松

蒼《あお》ざめた先輩の頬へ自分の頬を押し宛てて、

丑松

先生、先生。

藤村

そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。戸板に載せ、上から外套を懸けて、扇屋を指して出掛けた頃は、月も落ちかかつて居た。

丑松

さくさくと音のする雪を踏んで、先輩の一生を考えながらついでに行った。

藤村

我は穢多を恥とせず。先輩の言葉が心に浮かんだ。この時に成つて、丑松も気がついたのである。

丑松

自分は隠蔽《かく》そうとして、持つて生れた自然の性質を銷磨《すりへら》して居た。その為に一時《いつとき》も自分を忘れることが出来なかつた。今迄の生涯は虚偽《いつわり》の生涯だった。自分で自分を欺《あざむ》いて居た。ああ何を思い、何を煩う。我は穢多なり。

藤村

死んだ先輩に手を引かれて、新しい世界へ連れて行かれるような心地がした。それは今まで思いもよらなかつた考えだった。

丑松

告白。明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

藤村

そう決心して、生徒に言つて聞かせる言葉、進退伺いに書いて出す文句、その他の色々なことも想像した。彼は新しい暁《あかつき》の近づいたことを知った。

丑松がいる。

丑松 学校へ行く支度をする為に、朝早く蓮華寺へ帰った。庄馬鹿を始め、子坊主迄、談話《はなし》は猪子先生の最後、高柳の噂で持切って居た。昨日の朝、私の留守へ尋ねて来た客が亡くなったその人である、と聞いた時は、一同驚き呆れた。私はまた奥様から、妹が長野の方へ帰るように成ったこと、住職が手を突いて詫入《わびい》ったこと、夫婦別れの話も。見合せにしたということ聞いた。いつも寺では早く朝飯《あさはん》を済《すま》すところからして、部屋へも袈裟治が膳を運んで来た。こうして寺の人と同じように早く食うということは、近頃無い。朝は必ず生温《なまあたたか》い飯に、煮詰った汁ときまって居たのが、その日にかぎっては、飯も焚きたての気《いき》の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のにおいがうまそうに鼻の端《さき》へ来る。小皿には好物の納豆もついた。膳に向いながら、兎も角もこうして生きながらえ来た今日迄

《こんにちまで》を不思議にありがたく考えた。穢多の子の身であると覚期

《かくご》すれば、飯を食うにも我知らず涙がこぼれた。朝飯の後、机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射して来た。障子を開けて眺めると、銀杏《いちよう》の梢《こずえ》に、雪に包まれた町々の光景が見渡される。家と家との間からは、青々とした朝餐《あさげ》の煙が静かに立登った。小学校の建築物《たてもの》も、今、日をうけた。名残惜《なごりを》しいような氣に成って、ややしばらく眺め入って居たが、胸に浮んだのは『懺悔録』、第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更のように新しく感じて、この町の人々に告白するように、その文句を窓のところで繰返した。我は穢多なり。我は穢多なり。

丑松、「丑松」と書かれたお面を被る。

敬之進が来る。

敬之進 丑松は蓮華寺の山門を出た。とある町の角のところまで歩いて行くと、向こうから巡査に引かれて来る四五人の男に出逢《であ》った。いづれも腰繩を付けられ、蒼ざめた顔付して、人目を憚《はばか》りながら通る。中に一人、黒の紋付羽織、白足袋 穿《ばき》、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、すぐに高柳利三郎と知れた。よく見ると、一緒に引かれて行く怪しげな風体の人々は、高柳の為につかわれた壮士らしい。

丑松（丑松）見る見る高柳の一行は巡査の言うなりに町の角を折れて、やがて雪山の影に隠れてしまった。

敬之進 学校の運動場には雪が積上げてあった。

丑松（丑松）玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。授業の始まるまで、最後の監督をする積りで、あちこちこちと廻って歩くと、大鈴の音が響き渡ったのは間も無くであった。生徒は互いに上草履鳴して、我勝《われがち》に体操場へと塵埃《ほこり》の中を急ぐ。

敬之進 やがて男女の教師は受持受持の組を集めた。高等四年の生徒は後について、一緒に長い廊下を通った。授業だけは無事に済した上で、湧上《わきあが》る胸の思を制《おさ》えながら、彼は三時間目の習字を教えた。

丑松（丑松）午後の課目は地理と国語とであった。五時間目には、国語の教科書の外に、習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入ったので、それと見た好奇《ものずき》な少年はもう眼を丸くする。それを自分の机の上に載せて、例のように教科書の方へ取掛ったが、やがていつもの半分ばかりも講釈したところで本を閉じて、少し話すことが有る、と言って生徒一同の顔を眺め渡す。

お志保、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

お志保（生徒）先生、御話ですか。

丑松（丑松）ああ。皆さんに少し話す事があります。

銀之助、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

銀之助（生徒）御話、御話。

敬之進 と請求する声は教室の隅から隅までも拡《ひろが》った。

敬之進、「生徒」と書かれたお面を被る。

丑松（丑松）私は習字やら、図画やら、作文の帳面やらを生徒の手に渡した。中には、朱で点を付けたのもあり、優とか佳とかしたのもあった。または、全く目を通さないのであった。先ず其詫《そのわび》から始めて、なおしてやりたいは遣りたいが、もうそれをする暇が無いという話をし、こうして一緒に稽古をするのも今日限りであるという話をし、自分は別離《わかれ》を告げる為にここに居るということを話した。

藤村、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

藤村（生徒）先生。

敬之進（生徒） どういう事ですか？

丑松（丑松） 皆さんも御存じでしょう。この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶《ぼうさん》、それからまだ外に穢多という階級があります。まあ、穢多というものは、卑賤《いや》しい階級としてあるのです。もしその穢多がこの教室へやって来て、皆さんに国語や地理を教えるところでしたら、その時皆さんはどう思いますか、皆さんの父親《おとつ》さんや母親《おつか》さんは、どう思いますようか。実は、私はその卑賤《いや》しい穢多の一人です。どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが有ったツケ。あの穢多の教員が素性を告白《うちあ》けて、別れを述べた事を思い出して頂きたいのです。私は卑賤《いや》しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ちなさるように、それを心掛けて教えた積りです。皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親《おとつ》さんや母親《おつか》さんに私のことを話して下さい。今まで隠蔽《かく》して居たのは全くすまなかった、と言って、皆さんに告白《うちあ》けたことを話して下さい。私は穢多です、不浄な人間です。許して下さい。

丑松、「丑松」と書かれたお面を取り、ひざまずく。

藤村（生徒） 後列の方の生徒は急に立上った。一人立ち、二人立ちして、眺めるうちに、お志保（生徒） 教室に居る生徒は総立ちに成った。その時大鈴の音が響き渡った。
銀之助（生徒） 教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。
敬之進（生徒） 銀之助は職員室で、丑松のことを耳に入れた。
お志保（生徒） 思わず銀之助は職員室を飛出した。

銀之助、「生徒」と書かれたお面を取る。

銀之助 玄関を横切って、左右に馳違《はせちが》う少年の群を分けて、高等四年の教室に行ってみると、廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が瀬川君をとりまいて居た。（丑松に）君、大丈夫か？

丑松 許してくれ給え。

銀之助 解った、解った、君の心地《こころもち》はよく解った。むむ、進退伺いも用意して来たね。後の事は僕に任せるとして、君はすぐに帰り給え。

丑松 許してくれ給え。私は、私は穢多です。

銀之助と藤村がいる。

藤村 銀之助は敬之進の住居《すまい》を訪れた。友達思いの彼は心配しながら、丑松を追って尋ねて来たのであった。

銀之助 一寸伺いますが、瀬川君はこちらへ参りませんでしたか。

お志保が来る。

お志保 あれ、今御帰りに成ましたよ。

銀之助 今？それからどっちの方へ行きましたろう、御存じは有ますまいか。

お志保 あの、猪子さんの奥様が東京から御見えに成るそうですね。多分その方へ。ホラ市村さんの御宿の方へ尋ねていらしつたんでしよう。

銀之助 市村さんのところへ？ 実は僕も非常に心配しましてね、蓮華寺へ行つて聞いて

見ました。まだ学校から帰らんといい。それから市村さんの宿へ行つて見ると、あすこにも居ません。こりゃ、ここかも知れない、そう思つてやつて来たんです。

お志保 行違いに、おなんなすつたんでしよう。まあ御上りなすつて下さいませんか、

藤村 と言われて、炉辺《ろばた》へ上つた。お志保の頬には涙のあとが乾かずにあつた。

どういふことを言つて丑松が別れて行つたか、彼女の顔つきで胸に浮ぶ。銀之助はどうかして友達を助けたい、そう思ふのであつた。銀之助はお志保の身の上から聞き初めた。彼女は、すぐに、銀之助の頼もしい気象を看て取つたのである。

丑松と無二の朋友であるということも好く承知して居る。

お志保 本当に自分の心地《こころもち》も解つて、身を入れて話を聞いてくれるのは

この人だ、どうして父のところへ歸つて居るか、それを尋ねられた時はもう

胸一ぱいに成つてしまつた。蓮華寺を脱けて出ようと決心するまでの一伍一什

《いちぶしじゅう》何から話していいものやら、解らない位。

藤村 娘心の感じ易さ、暗く煤《すす》けた土壁の内部《なか》の光景《ありさま》を恥ずかしく思うという風で、着物の前を搔合せ聞かせる。

銀之助 あの寺を出ようと思ひ立つたのは、泣いて、泣いて、泣尽した揚句のこと。

だから、何処へ歸るといふ目的《めあて》も無かつたのであろう。

藤村 悲しい夢のように歩いて来る途中、雪の上に倒れて居る人に出逢つた。見ればその酔漢《さげよい》は父であつた。お志保は父がもう凍え死んだのかと思つた。

丁度通りかかる音作を呼留めて、一緒に助け起して、やつとのことで家まで連歸つて見ると、少し遅かろうものなら命をとられるところ。

銀之助 医者の話によると、身体の衰弱《おとろえ》は一通りで無い。助かる見込は有るまいとのこと。そればかりでは無い。不幸《ふしあわせ》はこの屋根の下にも待受けて居た。来て見ると、継母も、異母《はらちがい》の弟妹《きょうだい》も居なかった。その前の晩、烈しい夫婦喧嘩があつて、継母は泣叫んだという。下高井にある生家《さと》を指して、三人だけ子供を連れて、父の留守に家を出たものらしい。それは継母が自分で産んだ子供のうち、三番目のお末を残して、進に、お作に、それから留吉と、こう引連れて行つた。割合に温順《おとな》しいお末を置いて、あの厄介者のお作を腰に付けたは、流石に後のことをも考えて行つたものと見える。こういう中に、ひとり力に成るのは音作で、毎日夫婦して来て、物をくれるやら、旧《むかし》の主人をいたわるやら、お末を世話すると

言つて、自分の家の方へ引取つて居るとのこと。

銀之助 して見ると。今御家にいらつしやるのは、父親《おとつ》さんに、貴方に、それから省吾さんと、こう三人なんですか。

お志保 はあ。瀬川さんは御気の毒な様子でしたよ。いろいろ伺つて見たいと思つて居りますうちに、瀬川さんはさつさと出て行つておしまいなさる。後で私はさんざん泣きました。

銀之助 そうですかあ。ああ、僕の想像した通りだった。定めしあなたも驚いたでしょう、瀬川君の素性を始めて御聞きになつた時は。

お志保 いいえ。

銀之助 ホウ。今日始めてでもございませんもの。勝野文平さんがどこかで聞いていらしつて、いっぞや私に話しましたんですもの。

銀之助 あの男も饒舌家《おしゃべり》で、ほんとうに仕方が無い奴だ。何ですか、勝野君は何だつてまたそんなことを貴方に話したんでしょう。

お志保 親類はこれこれだの、今に自分は出世して見せるのツて妙な事ばかり言つて。今に出世して見せる？そんなことを。

お志保 それから、瀬川さんのことなぞ、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、もう口惜しくて、口惜しくて。気の毒でなりません。

銀之助 ほんとに？ほんとに貴方はそう考えて下さるんですか。僕は、あの友達を助けて頂きたいと思つてゐるような訳ですが

お志保 助けろと？私に？
銀之助 ええ。実は、この前の宿直の時に、瀬川君の意中を叩いて見たのです。友達と

いうものも有つて見れば、力に成るといふことも有ろうぢやないか。こう言いました。すると、瀬川君は貴方のことを言出して。僕には貴方を大切に思つてゐるのはわかりました。彼は自分の素性を考え、到底及ばない希望《のぞみ》と。それで貴方のところに来て、今まで隠してゐた素性を自白したのです。

もし貴方にあの男の真情《こころもち》が解りましたら、一つ助けてやろうという考えを持って下さることは出来ますまいか。

お志保 まあ、何と申上げていいか解りませんけれど

藤村 と、お志保は耳の根元までも紅《あか》くなつて、

お志保 私はもうその積りで居りますんですよ。

銀之助 一生？

お志保 はい。あの、御願いで御座ますが、もし「懺悔録」という御本が御座いましたら、貸して頂けませんか。

銀之助 「懺悔録」？

お志保 猪子さんの御書きなすつたとかいう

銀之助 あれですか。よく貴方はあんな本を御存じですね。

お志保 瀬川さんが平素《しょっちゅう》読んでいらっしやいましたもの。

銀之助 承知しました。彼のところに有ましようから、行つて話して見ましよう。

もし無ければ、どこか捜して見て、是非一冊贈らせることにしまししよう。

藤村 こう言つて、銀之助は市村弁護士の宿を指して急いだ。

銀之助がいる。

銀之助 扇屋では人々が蓮太郎の遺骸《なきがら》の周囲《まわり》に集ったところ。

親切な亭主の計いで、焼場の方へ送る前に亡くなった人の魂を弔いたいという。

その日の午後東京から着いた蓮太郎の妻を始め、弁護士、瀬川君も居た。

藤村が来る。

藤村 旅で死んだということをおもひに思い、扇屋の家の人も弔いに来る。

縁もゆかりも無い泊客ですら廊下を集って、寂しい木魚の音に耳を澄す。

焼香も済み、新聞の記者も尋ねて来て、聞き取ったことを手帳に書留める。

市村弁護士は銀之助を部屋の片隅へ招いた。相談というは丑松の身に関したこと。

銀之助 市村弁護士の言うには、今となってはこの飯山に居にくい事情も有ろうし、

未亡人はまた未亡人でこから帰るには男の手を借りたくも有ろうし、

するからして、蓮太郎の遺骨を護って、一緒に東京へ行って貰いたいがどうだろう。

藤村 選挙を眼前《めのまえ》にひかえさせなければ、無論、自身で随って行くべきで

有るが、それは未亡人が強いて辞退する。せめてこの際選挙の方に尽力して

夫の魂を慰めてくれと。

銀之助 聞いて見れば未亡人の志も、もつとも。一切の費用は自分の方で持つ。是非。

とのことであつた。「学校の方都合は、どんなものでしょう。」と聞かれたので

学校の方ですか。実は、瀬川君を休職にすると行って、その相談が有つたという位

ですから、差し支えない。郡視学もその積りで居るそうです。学校の方のことは

僕が引受けて、どんなに都合の好いように致しましょう。一日も早く飯山を

発ちました方が瀬川君の為には得策だろうと思ふんです。

藤村 こういう相談をして居るところへ、棺《ひつぎ》が持運ばれた。人々は最後の

別かれを告げる為にその棺の周りに集つた。焼場の方へ送られることに

成つた頃は、もう薄暗かつたのである。火を入れるところまで見届けて、焼場から

帰つた後、皆で火鉢を取囲《とりま》いて、扇屋の奥座敷で話した。飯山病院から

追われ、鷹匠《たかしょう》町の宿からも追われた大日向が、実は、追放の恥辱

《はづかしめ》が非常な奮発心を起させ、アメリカのテキサスで農業に従事しよう

という新しい計画を市村弁護士の口を通して、丑松の耳に希望《のぞみ》を囁いた。

銀之助 見給え。捨てる神あれば、助ける神ありさ。

藤村 銀之助から聞いたお志保の物語。あの決心と涙はどんなに深い震動を丑松に伝え

たろう。敬之進の病氣、継母の家出、お志保の心情を可傷《いたわ》しく思わせる。

銀之助 絶望し、断念し、素性まで告白して別れた瀬川君の為に、ひそかに熱い涙をそそぐ人が有ろうとは。

藤村 その翌日、銀之助は友達の為に、学校へも行き、蓮華寺へも行き、お志保のところにも行った。蓮華寺にある丑松の荷物を取纏めた。銀之助はまた、お志保のことを未亡人にも話し、市村弁護士にも話した。

銀之助 女は女に同情《おもいやり》の深いもの。ことにお志保さんの不幸な境遇は未亡人の心を動かしたのであった。先々は東京へ引取り一緒に暮らしたい。瀬川君の身が決まった暁には自分の妹にして結婚させるようにしたい。こう言出した。兎に角、後の事は市村弁護士も力を添える。

藤村 という訳で、万事は市村弁護士と銀之助とに頼んで置いて、丑松は慌ただしく飯山を発つことに決めた。

藤村がいる。

藤村

出発の日が来た。夜明け頃から曇《みぞれ》が降出して、扇屋に集る人々の胸には旅の思いを添える。一台の櫓《そり》は朝早く扇屋の前で停った。下りた客は厚羅紗《あつらしゃ》の外套で深く身を包んだ紳士風の人、櫓曳《そりひき》に案内させて、弁護士に面会を求める。大日向が来た。市村弁護士は出迎えた。大日向は約束を違《たが》えずやって来たので、薄暗いうちに下高井を発ったという。上れと言われても上りもせず、ただ上《あが》り框《がまち》のところへ腰掛けたままで用談を済し、蓮太郎への弔意《くやみ》を述べ、やがて行こうとする。弁護士は丑松のことを語り聞かせた。

丑松が来る。

丑松

曇《みぞれ》はしとしと降りそそいで居た。私は人々と一緒に、先輩の遺骨の後について、雪の上を滑る櫓の響を聞きながら、静かに自分の一生を考えながら歩いた。猜疑《うたがい》、恐怖《おそれ》ああ、ああ、二六時中忘れることのなかった苦しみは僅かに胸を離れた。今は鳥のように自由だ。踏む度にさくさくと音のする雪の上は、確かに自分の世界の様に思われた。

藤村

上の渡しの方へ曲ろうとする町の角で、一同はお志保に出逢った。

お志保が来る。

藤村

丑松の紹介で、彼女は始めて未亡人と弁護士とを知った。女同志は言葉を交しながら歩き初めた。

お志保

上の渡しの長い船橋を越えて対岸の休み茶屋に着いた。そこには銀之助さんが早くから待受けて居た。

藤村

例の下高井の大尽も出て迎える。市村弁護士が丑松に紹介したこの大日向という人は、見たところ余り価値《ねうち》の無さそうな、田舎の漢方医者とも言ったような、平凡な容貌《かおつき》で、これがアメリカのテキサスあたりへ渡って新事業を起そうとする人物とは、いかにしても受取れなかったのである。

丑松

言葉を交して居るうちに、私はこの人の堅実《たしか》な、引締った、底の知れないところもある性質を感得《かんづ》くように成った。

藤村

大日向はテキサスにあるという日本村のことを丑松に語り聞かせた。

銀之助が来る。

銀之助 かみさん。それでは、さっきのものを、ここへ出して下さい。

藤村 と銀之助は指図する。別れの酒をこの休み茶屋で酌交《くみかわ》すのは、送る人も、送られる人も、共に長く忘れまいと思ったことであつたらう。

丑松 いろいろ君には御世話になった。

銀之助 それは御互いサ。しかし、こうして君を送ろうとは、僕も思いがけなかつたよ。人の一生という奴は實際解らないものさね。

丑松 いずれまた東京で逢おう。

銀之助 ああ。さあ、なんにもないが一盃飲んでくれ給え。

敬之進が来る。

敬之進 次第に高等四年の生徒が集まって来た。その日の出発を聞伝えて、せめて見送りしたいという心根から、丑松を慕ってやって来たのである。

丑松は生徒たちの間を歩いて、別れの言葉を取り交わした、

藤村 やがて櫓《そり》の用意も出来たという。

丑松 御機嫌よう。

藤村 それが最後にお志保を見た時の丑松の言葉であつた。

お志保 涙が頬を伝って流れ落ちた。

丑松 櫓《そり》は雪の上を滑り始めた。

丑松、去る。

藤村 これは過去の物語である。

敬之進 過去には後の時代に取って、

銀之助 反省すべき事柄も多い。

お志保 過去こそ、真実であるからであらう。

おわり

原作 島崎藤村
戯曲化 黒岩力也

(戯曲化するにあたりweb青空文庫のデータを使用した)

出番表

																	丑松	銀之助	敬之進	お志保	藤村		お面	
【19】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
【18】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
【17】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○								
【16】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「生徒×4」「丑松」							
【15】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「奥様」								
【14】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「文平」								
【13】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「奥様」								
【12】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「文平」「校長」								
【11】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
【10】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「住職」「袈裟治」「準教員」「古本屋」								
【9】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「省吾」「高柳」「袈裟治」								
【8】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「省吾」「ママ母」								
【7】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「文平」「奥様」「丑松」								
【6】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○									
【5】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「校長」「町会議員」「郡視学」								
【4】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「猪子」								
【3】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「奥様」「丑松×3」								
【2】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「高柳」「猪子」「市村」								
【1】	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	「親父」								